

埋蔵文化財発掘調査

昭和63年度 年 報

財団法人栗東町文化体育振興事業団

発刊によせて

道の町、栗東町には先人の生活文化のアカシである種々の文化財がある。とくに、久しく地下に埋没し、ようやく日のめをみるようになった埋蔵文化財に注目したい。最近の古墳の発掘が第六世紀の日本歴史の空白を埋めるであろうといわれる。

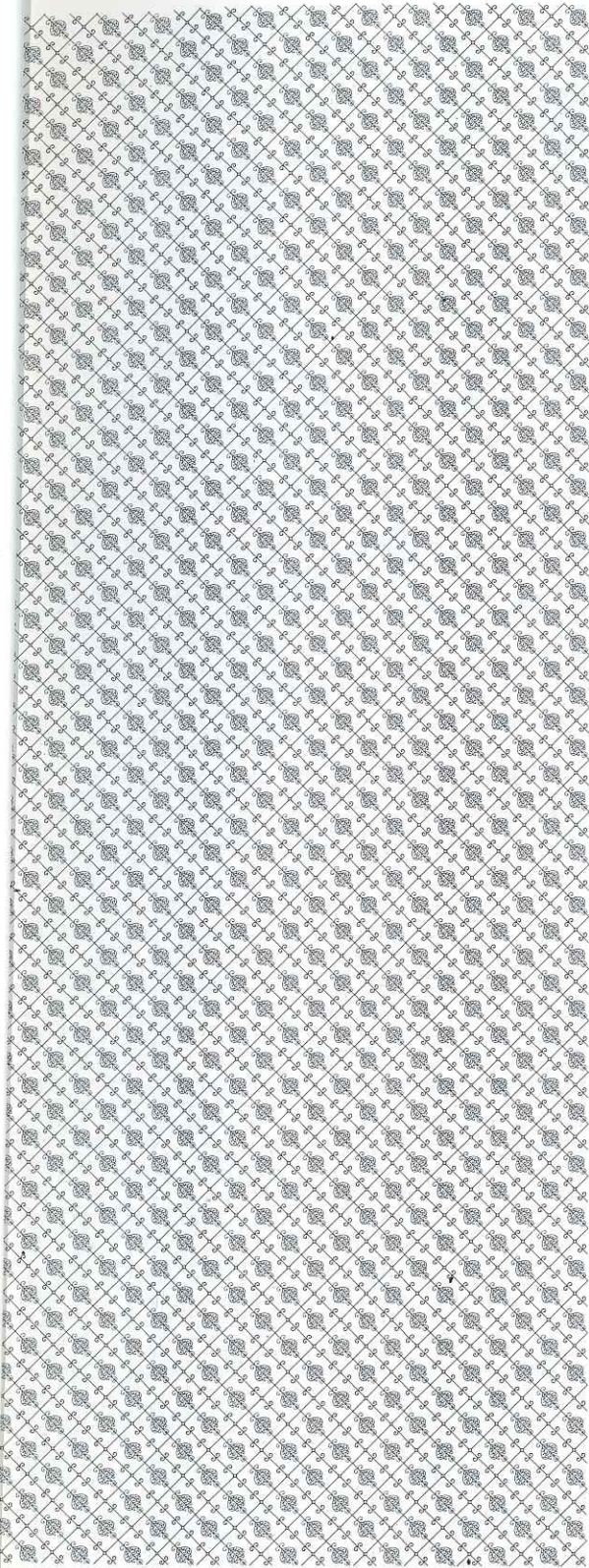
われわれは、古文化財のもつ意味に思いをいたすべきである。ここに、埋蔵文化財の発掘調査に当たっている諸君が、その研究調査の一端を公刊せられることは誠に有難いことであり敬意を表するものである。読者諸子が、この書を通して先人との語らいをもたれることを期待するとともに、発掘調査にあたり、ご協力をいただいた方々に厚くお礼申し上げたい。

財団法人栗東町文化体育振興事業団

理事長 武 邑 尚 邦

例 言

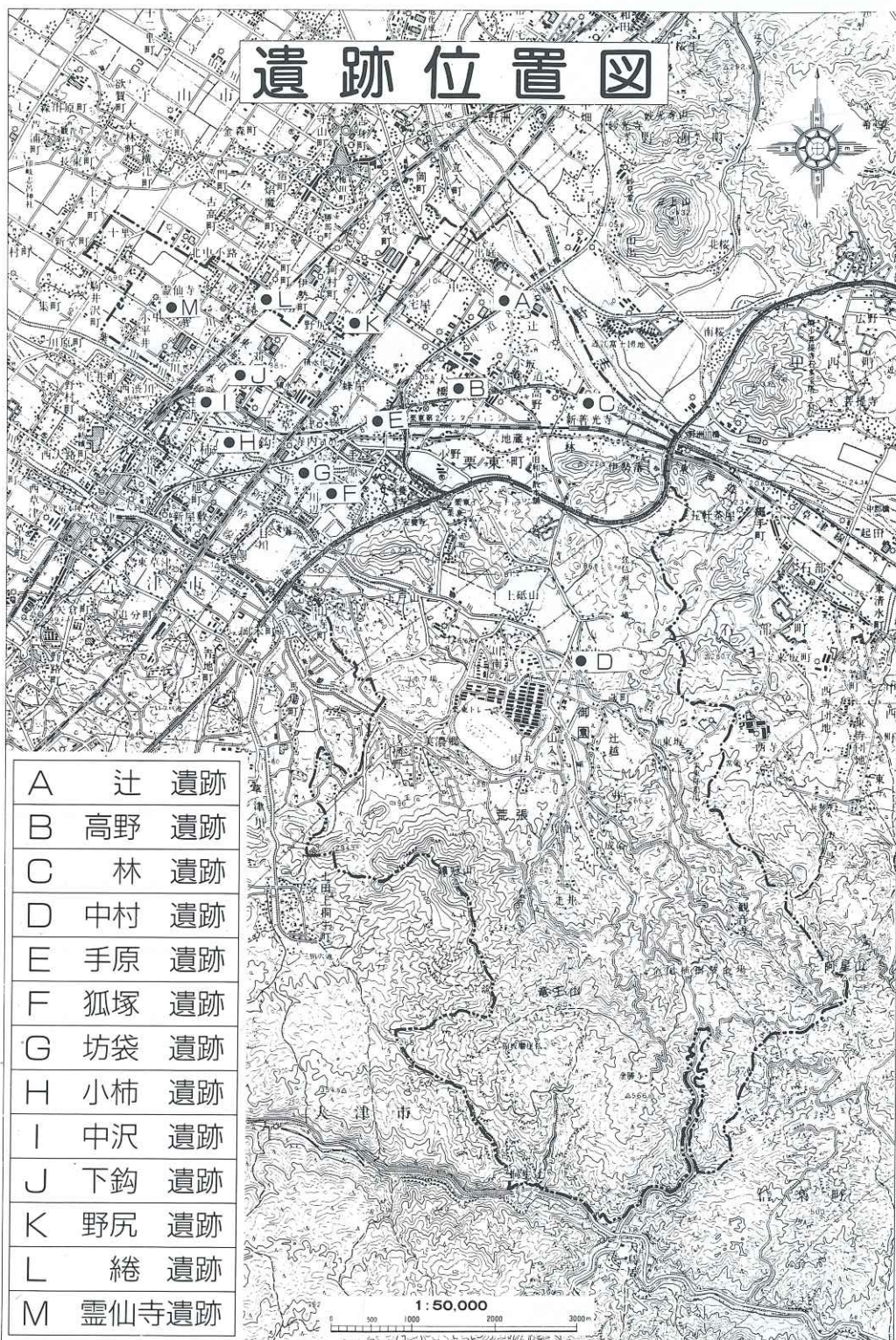
- 1、本書は、財団法人栗東町文化体育振興事業団の昭和63年度埋蔵文化財発掘調査事業の概要をまとめたものである。
- 2、調査にあたっては、滋賀県教育委員会の指導助言を得て、栗東町教育委員会が調査主体となり、財団法人栗東町文化体育振興事業団が実施した。
- 3、調査と編集は、平井寿一、大崎隆志、近藤広、雨森智美、佐伯英樹（事業団）、清水好洋、松村浩（町教委、兼務）による。



目 次

発刊によせて……………	1
例言……………	2
目次……………	3
地図……………	4
一覧表……………	5
辻遺跡……………	6
中村遺跡……………	10
手原遺跡……………	12
狐塚遺跡……………	14
坊袋遺跡……………	20
小柿遺跡……………	24
下鈎遺跡……………	30
野尻遺跡……………	34
綾遺跡……………	40

遺跡位置図



	遺跡名	調査地	原因	遺構	遺物
1	辻遺跡	出庭字かしあげ	倉庫建設	古墳時代～奈良時代の旧河道、土壇	土師器 須恵器 木製品
2	辻遺跡	出庭字中の町 他	倉庫建設 他	竪穴式住居、掘立柱建物、周溝状遺構	古式土師器 土師器 須恵器
3	高野遺跡	大橋 地先	区画整理	中世の掘立柱建物、溝	土師器 須恵器 獣骨
4	高野遺跡	大橋	倉庫建設 他	溝（時期不詳）	
5	高野遺跡	大橋字一本松	造成工事	中世の掘立柱建物	土師器 黒色土器
6	高野遺跡	高野字イバ立	共同住宅	古墳時代竪穴式住居、旧河道	須恵器 土師器
7	高野遺跡	高野 地先	(町) 土木工事	明確な遺構なし	土師器 須恵器 黒色土器
8	林遺跡	林字上ノ浦	宅地造成	中世の溝、土壇	土師器 中世陶器
9	中村遺跡	御園字中村	造成工事	平安時代の建物跡、ピット 等	施釉陶器 黒色土器 土師器 木製品
10	手原遺跡	手原	造成工事	白鳳～鎌倉時代の掘立柱建物、自然流路	土師器 黒色土器
11	狐塚遺跡	川辺字東浦	造成工事	古墳時代の旧河道、中世の掘立柱建物、井戸等	石器 古式土師器 黒色土器 青磁 下駄等
12	狐塚遺跡	川辺 地先	下水	弥生時代～中世の竪穴式住居 掘立柱建物、井戸、溝等	弥生土器 土師器 須恵器 古銭 漆碗等
13	狐塚遺跡	川辺字堂	造成工事		
14	坊袋遺跡	坊袋字杉の木	住宅建設	弥生～古墳時代初の掘立柱建物、溝	弥生土器 土師器 石鏃
15	坊袋遺跡	坊袋字杉の木	共同住宅	弥生～古墳時代初の溝等	弥生土器 古式土師器 木製品
16	小柿遺跡	小柿字南里	造成工事	古墳時代旧河道、平安時代の建物跡等	土師器 黒色土器 木製品
17	小柿遺跡	小柿字下角屋	倉庫建設	古墳時代の旧河道、土壇、ピット	古式土師器 須恵器 滑石製品等
18	中沢遺跡	中沢 地先	道路	弥生時代の溝・流路・土壇、古墳時代の流路	弥生土器 土師器 須恵器 黒色土器 石・木製品
19	下鉤遺跡	下鉤 地先	区画整理	古墳時代～中世の土壇、溝、掘立柱建物等	土師器 須恵器 黒色土器 輸入陶磁 陶器 石製品
20	下鉤遺跡	荻原字溝畑	造成工事	弥生時代末の沼状遺構	弥生土器 土師器 須恵器
21	下鉤遺跡	荻原 地先	下水	明確な遺構なし	
22	下鉤遺跡	荻原字南代	建築工事	古墳時代の溝	須恵器 木製品
23	野尻遺跡	野尻	工場増築	竪穴式住居、掘立柱建物群、屋敷跡、大溝	土師器 須恵器 緑釉 黒色土器 瓦 硯
24	野尻遺跡	野尻	倉庫建設	地震跡、平安時代の掘立柱建物、溝等	土師器 須恵器 緑釉
25	野尻遺跡	野尻字星丸	倉庫建設	鎌倉時代の水田址、ピット	土師器 黒色土器
26	縄遺跡	縄字北星塚	造成工事	古墳時代初頭の溝、平安時代の溝	古式土師器 須恵器 黒色土器
27	縄遺跡	北中小路字仏願寺田	道路	中世の濠、井戸等	黒色土器 輸入陶磁 陶器 木製品等
28	霊仙寺遺跡	霊仙寺	宅地造成	縄文～弥生時代の 沼沢地、土壇	縄文 弥生土器 土師器 須恵器 灰釉 緑釉
29	霊仙寺遺跡	霊仙寺南松	店舗新築	弥生時代の流路、土壇、古墳時代の溝	弥生土器
30	霊仙寺遺跡	霊仙寺大溝	幼稚園増築	弥生時代の溝、土壇	弥生土器 石器

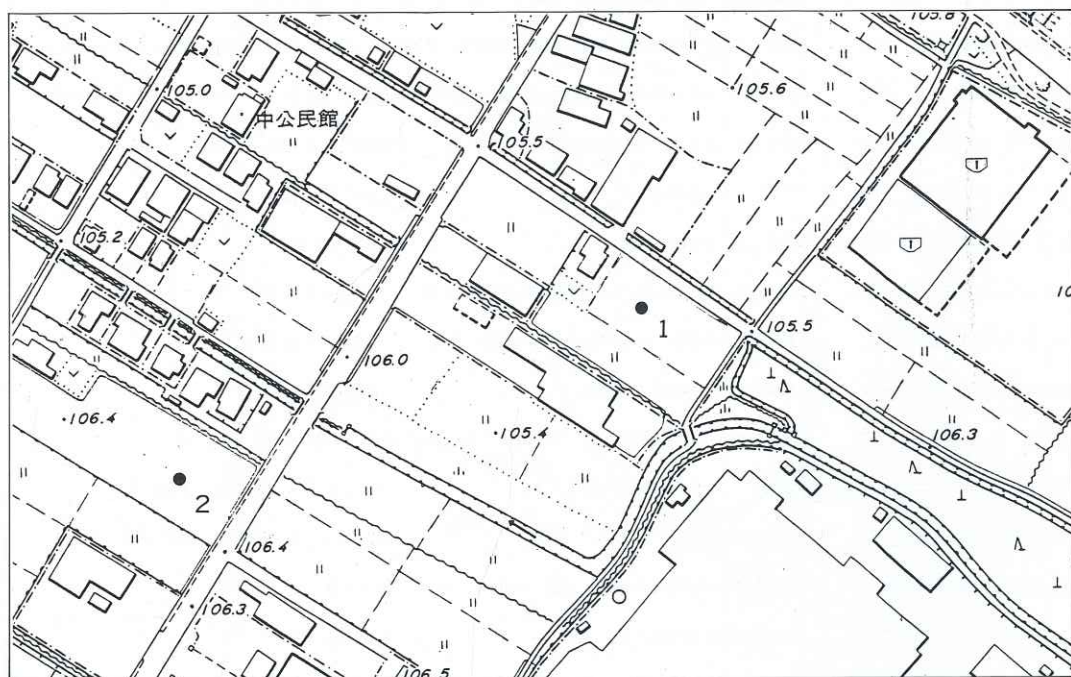
辻遺跡

本遺跡は栗東町大字辻・出庭に所在し、野洲川の形成した左岸、自然堤防状の微高地(標高104~105m)に立地する縄文時代以降、近世に至る複合遺跡である。これまでに実施された調査により、それらは以下の5期に大別される。Ⅰ期：縄文時代晩期、Ⅱ期：古墳時代~奈良時代、Ⅲ期：奈良時代~平安時代前期、Ⅳ期：平安時代後期~鎌倉時代、Ⅴ期：近世以降。中でも、Ⅱ期のそれは隣接する岩畑、高野遺跡と共に栗東を代表する古墳時代集落址群を形成しており、これまでの調査で竪穴式住居300棟以上や掘立柱建物30棟以上が確認されている。

今年度実施した調査(1)では竪穴住居の発見こそなかったが、辻遺跡ではこれまで知られていなかった多量の木製品が出土し、本遺跡における古墳時代の様相に新たな資料を付加することになった。以下にその概要を記述する。

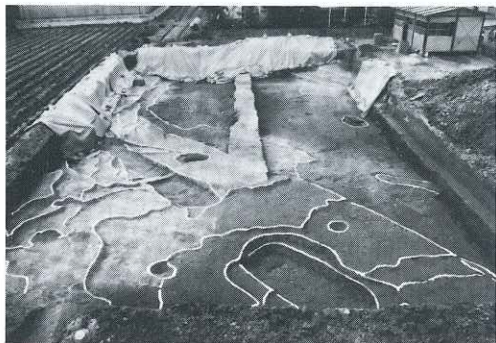
多量の木製品を出土した遺跡は幅員25m以上、深さ2.5mを計り、蛇行して西流する旧河道である。全幅はおそらく40mを超える河川であり、隣接地を流れる、この付近の主要河川、今井川の当時の流路と推定される。旧河道内の埋土は大きく2層に分けられる。下層には有機質土層が厚く推積し、その直上より多量の木製品が出土している。共伴して出土した須恵器は5C末~6C初頭のものである。上層は微・細砂や礫がレンズ状に幾層にも積み重なり、ぶ厚い砂礫層を形成しており、その当時、水量は川幅いっぱいにおよぶことも再三であった様である。中からはローリングを受けた土師器や須恵器片が出土している。これらは7C中葉のものである。

ところで、この様に豊かな水量を誇ったこの河川も8Cに入ると、もはや流れを見ることがなくなり、ほぼ完全に埋まってしまった様である。あるいはこの時期、近接して新たな河川を掘り込むと言った大規模な河川改修が為されたのかもしれない。以後、この河川敷きは水田として生き続けることになる。



出土した木製品は約400点を数える。ホゾ穴を穿った丸太や板材等の建築部材が最も多く、他に、スキ・クワ・ヨコヅチ等の農具類、

糸を紡ぎ、布服を織る紡織具部材、祭祀、儀礼用に使用する特殊な製品（大刀・琴柱）、容器（槽）等も含まれている。



旧河道全景



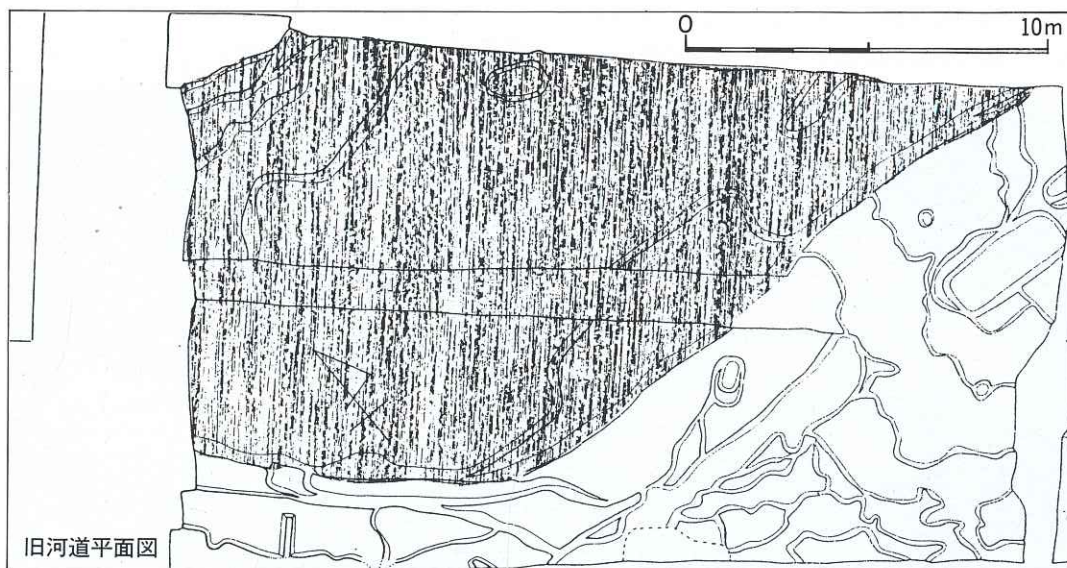
須恵器出土状況



槽出土状況



建築部材出土状況



辻遺跡②

本調査地は過去に煉瓦製造用に大規模な土取り工事が行なわれたと言われる地区に当り、遺構の損壊が当初から予想された。耕作土を除去すると床土とする層もなく、耕作土直下に古墳時代前期以降の遺構が検出され、また多くの攪乱坑が見受けられた。

古墳時代前期の遺構は幅約1～2mの曲面する溝状の遺構で、U字状の断面を呈しコーナー付近で浅くなる。最深部で55cm、最浅部で5.6cmを計る。溝内からは小形器台、小形丸底鉢及び甕が破片で出土する。方形周溝墓の周溝部である可能性がある。

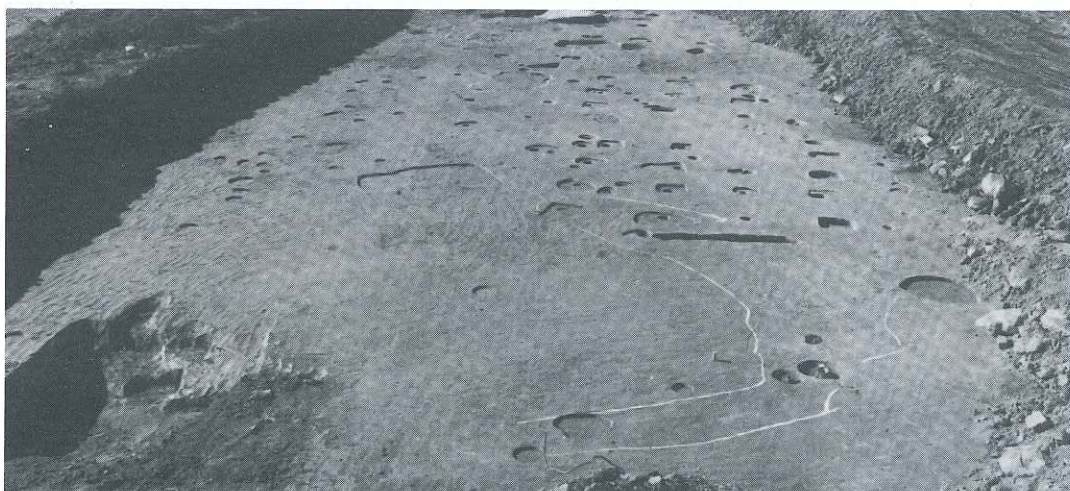
古墳時代中期の時期の遺構には東西にならぶように竪穴式住居跡2棟がみられる。いずれも方形で一辺約6mの規模をもつ。東側の住居は調査区外に広がり調査区域では柱穴1カ所及び土壇1基を検出したが炉またはカマドは検出しなかった。床面上からは甕、高杯、壺の土器のほか、滑石製白玉が1点出土した。西側の住居はかなり深く、広く攪乱を受けており、床面下に達する部分もあった。四支柱穴の大きさは径約45cmの円形状の掘方内に17cm程の柱穴がみられた。また、住居内東及び北辺に側壁溝が認められ、北辺の壁にく

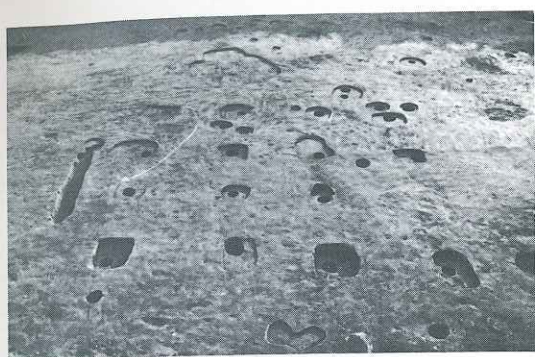
つつくように赤く焼け締った部分がみられた。カマド跡かどうかは判断できなかった。住居内南壁近くには長径約120cm、短径約80cmの楕円形の土壇が存在し、堆積層中に厚さ18cmにわたり炭化物が堆積していた。また、この住居については、壁面が赤黒く焼けた部分が見受けられるほか、住居床面上の埋土中にも炭化物をふくむ層が存在しており焼失した住居跡と考えられる。遺物については高杯、壺、甕片が出土する。

奈良時代の遺構は調査区北東で検出された4棟の掘立柱式建物である。3間以上×2間以上の建物、3間以上×1間以上の建物、2間×1間の建物等で倉庫跡と考えられる。柱抜き穴から須恵器杯1点を埋めたものが3カ所において確認された。

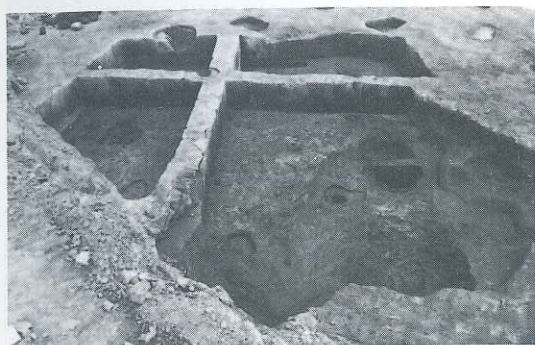
このほか、調査区の中央部に4棟の掘立柱式建物跡が検出された。最も大きな規模をもつものは3間×3間(約18m²)で他の3棟は2間×2間(約14m²)の規模を測る。掘方は約70cmの方形で径約20cm程度の柱穴を有する。これらも倉庫群と考えられるが、時期については出土遺物がなく決しがたい。

時期が前後するが、調査区東端では流路跡が検出され、古墳時代後期から平安時代にかけての遺物が出土した。





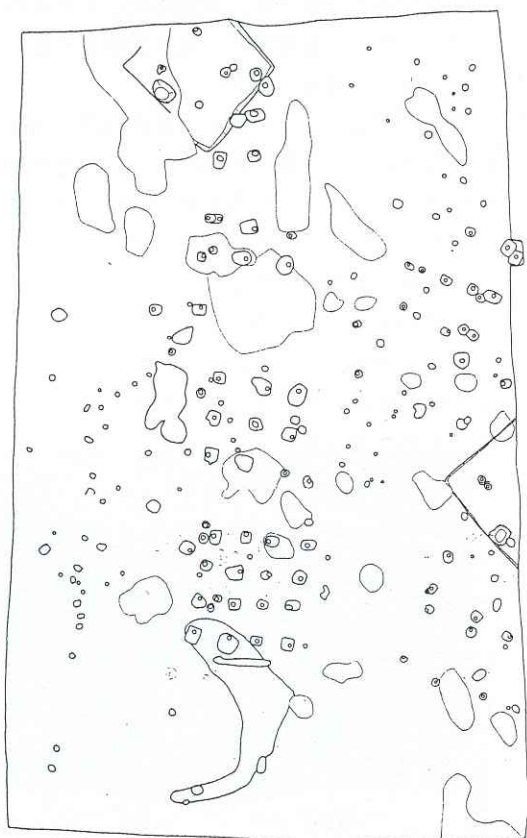
柱間3間×3間の倉庫跡 (時期不詳)



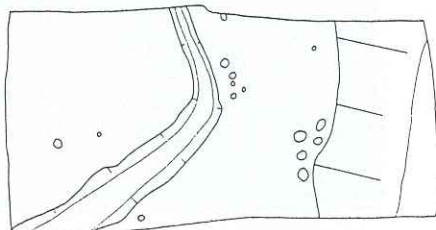
調査区西側で検出された堅穴式住居
(古墳時代中期)



周溝状遺構 (古墳時代前期)



0 10m



中村遺跡

中村遺跡は、栗東町の東側に位置し、近くには金勝川が西流している。その右岸には平野が広がり、上砥山遺跡と隣接して存在している。周囲の丘陵には、白鳳時代から平安時代にかけての須恵器窯や、竜王古墳を代表とする上砥山古墳群が存在する。

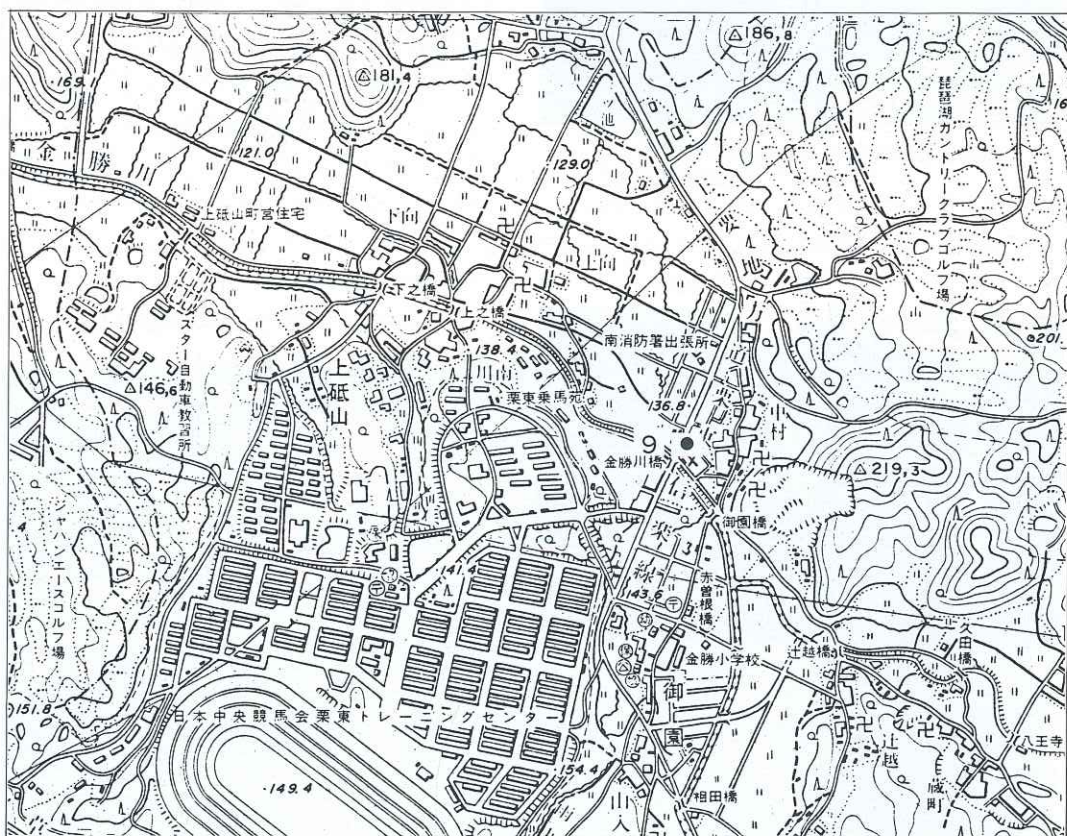
過去の調査では、平安から鎌倉時代（10世紀～13世紀頃）の掘立柱建物、井戸、流路等が確認されており、県道栗東信楽線を境に遺構が密集している。遺物では、流路から多量の須恵器、黒色土器等が出土しており、なかには墨書土器も数点発見されている。

近年の調査では、上砥山遺跡に近い方で、古墳時代後期の堅穴式住居、土壇が確認されている他、奈良時代と考えられる掘方1m前後で2間×3間の建物も確認されている等、

古墳時代から鎌倉時代まで続く遺跡ということがわかってきている。



昭和63年度は場整備事業に伴う調査



中村遺跡⑨

本調査地は既存宅地で地表下約1.0mに平安時代以降の遺構が分布していた。

平安時代前期の時期と思われる遺構には径約1.6m、深さ46cmを測る円形土壇がある。須恵器杯片などとともに曲物の底板材かと思われる木製品が出土した。

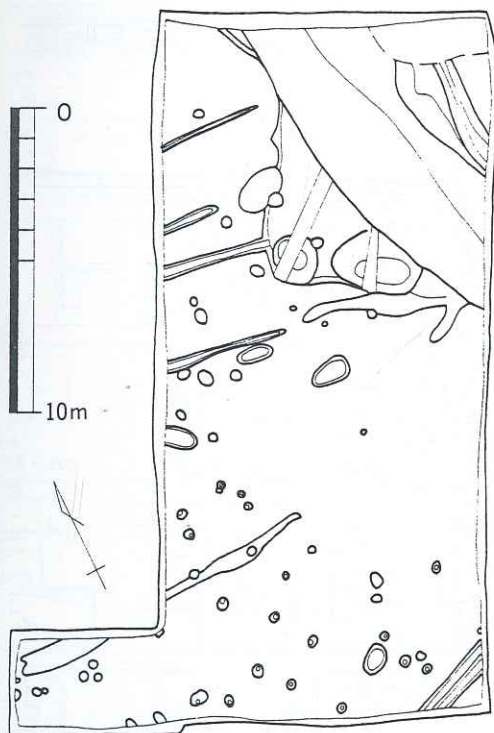
平安時代後期の時期の遺構は掘立柱式建物、土壇、溝、落ち込み状の遺構がある。建物1は5間以上×4間以上、建物2は3間以上×2間以上の規模をもつ。径約50cmの円形状の掘方内に径約20cmの柱穴が平均的である。総柱の建物1はほぼ磁北にその一方向をあわせて建てられ、建物北側の2条の小溝もその軸方位から建物1に関係したものとみられる。このことはやや東に方位をふった建物2と建物北側に存する2条の小溝についても同様である。この2条の小溝については幅

2m程の路に伴った側溝と考えることができる。このほか建物1に伴う門跡とも思われるものも存するが明確ではない。調査区の東端付近には落ち込みが広がる。流路に切られ形状等明らかでないがL字状に屈曲し、深さはおおよそ18cmを計る。落ち込み底には長径約3m、短径約2mの規模をもった楕円形の土壇かと思われるものが認められる。

中世以降の遺構には幅7m以上の流路及び土壇1基が検出された。土壇は長径約1.5m、短径約0.8mを計る。壇内からは陶器片が出土する。流路はほぼ南北に方位をもつが最深部で約20cmを計り、下層に湧水を伴う砂層が存したため調査面積も小さく時期を求める遺物もなかったが最上層で陶器片が出土したため、一応この時期とした。



遺跡全景。左側は掘立柱式建物
(平安時代)



手原遺跡

本遺跡は栗東町大字手原に所在し、かねてより古瓦の散布が知られ、また湖南平野一帯に広く残存する条里地割（栗太主条里：N—33°—E）とは異なり、正南北方向の地割が認められるところから、廃寺跡や官衙跡として想定されてきた遺跡である。その立地は葉山川や近世東海道の道筋で跡付けられる野洲川旧河道の形成した自然堤防状の微高地（標高103～105m）に在り、昭和56年以降実施された調査により、Ⅰ期：白鳳時代、Ⅱ期：奈良時代～平安時代前期、Ⅲ期：平安時代後期～鎌倉時代の3期に大別される多様な遺構、遺物が確認されている。

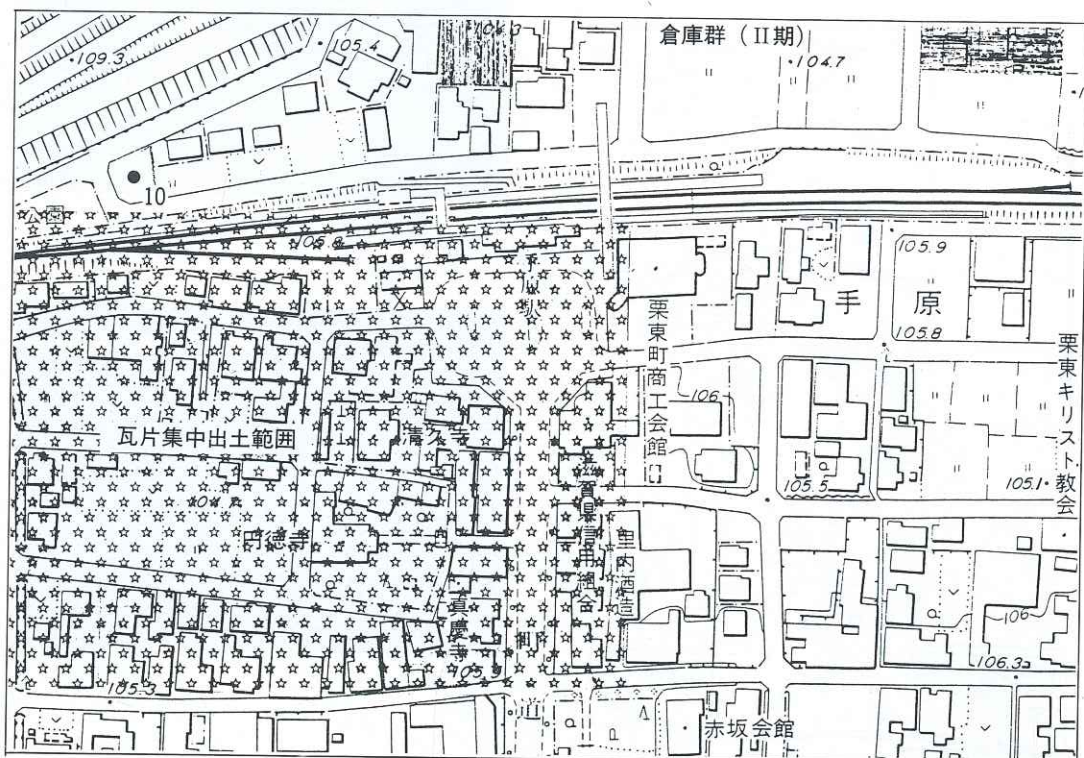
今年度実施した調査（10）は調査面積200㎡の小規模な調査であったが、3棟の掘立柱建物や不整流路等の遺構が確認され、新たな資料を付加することになった。以下にその概

要を記述する。

掘立柱建物：S B01は桁行3間、梁間2間の総柱構造を取る南北棟の建物。棟方位はN—14°—E。規模は5.1m×3.6m。柱穴掘りかたは一辺60～70cmの不整形形状を呈する。柱穴径は20～25cm。柱穴内より土師器細片出土。S B02は一部のみの確認。桁行3間×梁間1間以上。棟方位はS B01と同じ。柱穴掘りかたは一辺60cmの方形状を呈する。柱穴径は20cm。S B03は未確認の柱穴も多く、明瞭ではないが、桁行4間以上、梁間3間の総柱建物と想定される。柱穴掘りかたは径30cmの円形状を呈する。黒色土器や土師器片が若干認められる。

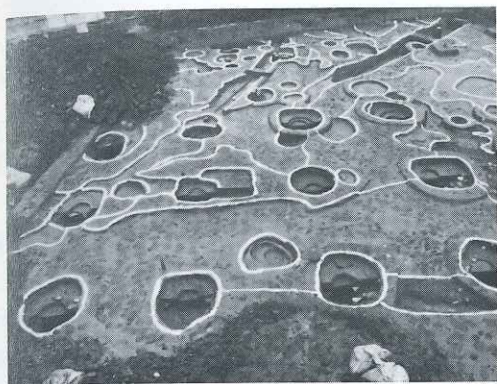
S B01・02は平安時代前期、S B03は平安時代末期～鎌倉時代初頭の所産と思われる。

不整流路：南東から北西方向へ流れる流路。深さ0.2m。その内部に深さ0.5m、幅員1.0mの一段深くえぐられた細流が南東から北西方向へ、あるいは南西から北東方向へと



不整方向に流れている。下層からはまったく遺物は出土していないが、上層からは輻線単弁8葉軒丸瓦や4重弧文軒平瓦を含む瓦片や

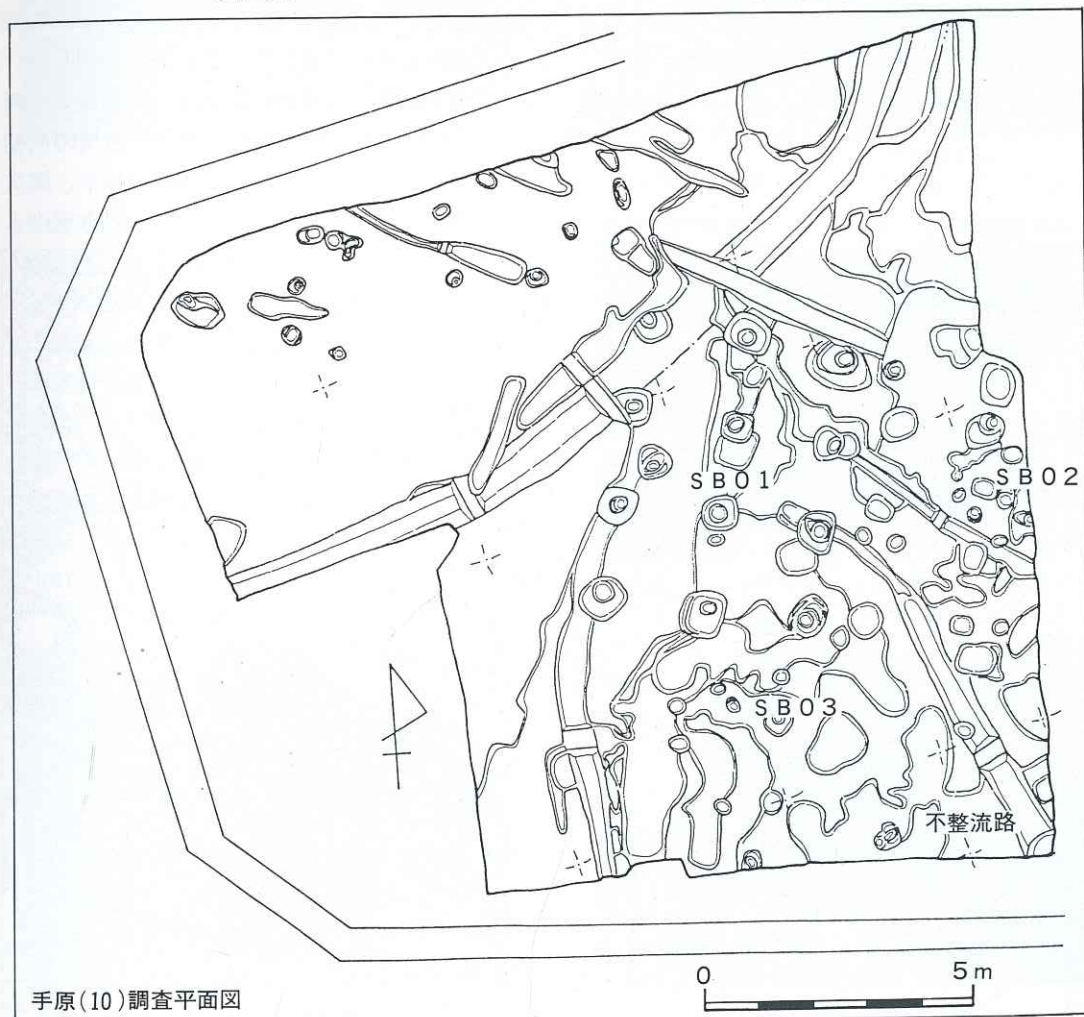
須恵器杯蓋身が出土している。出土した須恵器から見て、この自然流路はおそらく平安時代初頭にほぼ完全に埋ったものと思われる。



SB01



SB01柱穴



狐塚遺跡

狐塚遺跡は、金勝川と葉山川に挟まれた沖積平野に立地し、背後には金勝山系より連なる丘陵の先端部が迫っている。また、近世東海道が、草津川合流付近の金勝川沿いから本遺跡西北部を通過しており、古代においても東海道が近接して通過していたと推定できる。

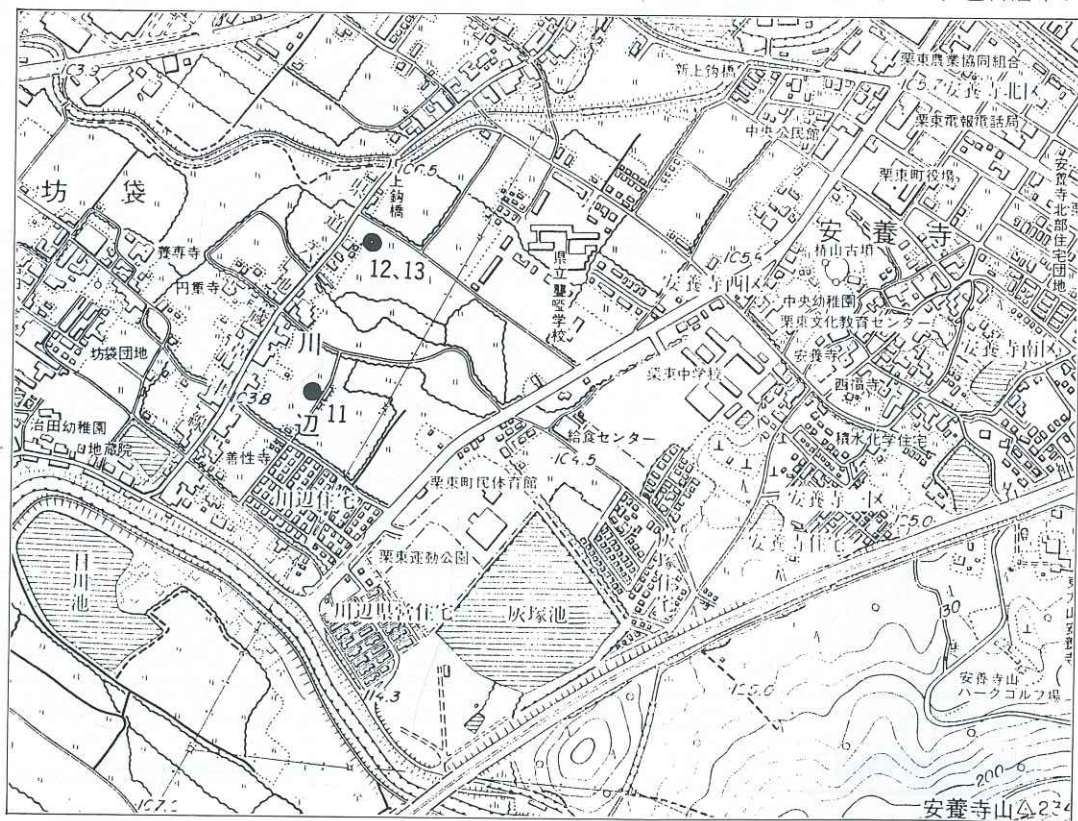
西側に接する坊袋遺跡からは、弥生時代中期後半から古墳時代初頭ころの遺構が見つかった。

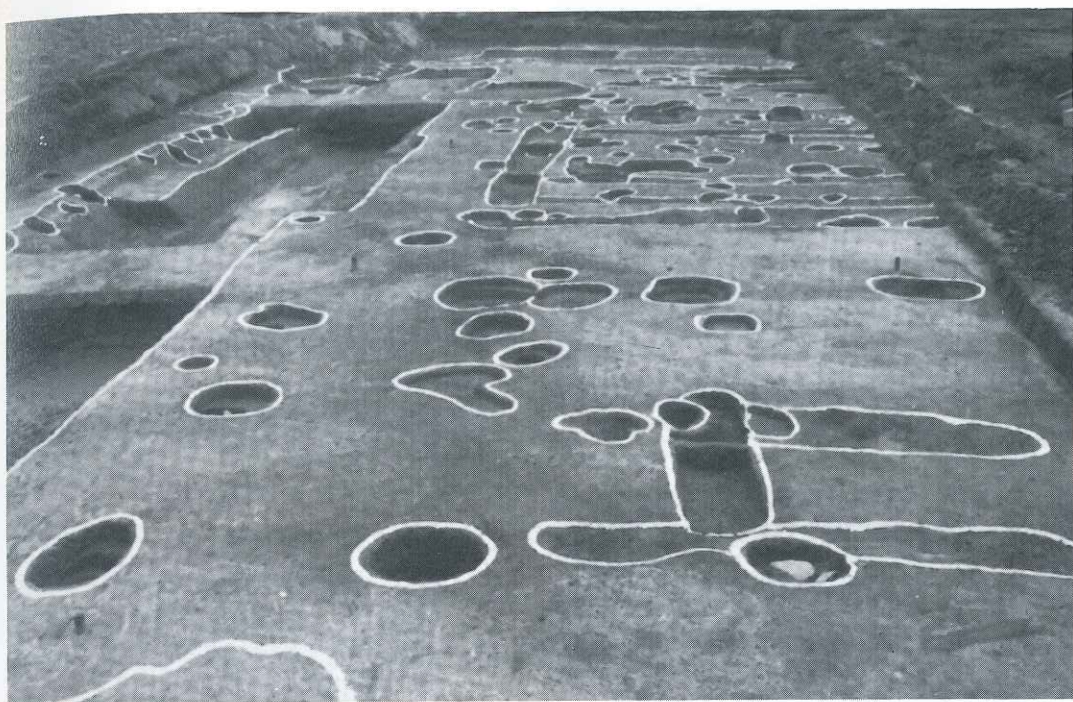
遺跡の東南に近接した安養寺山麓には、下味古墳、新開古墳、山ノ上古墳、毛刈古墳などが連なり、名神高速道路建設の際の調査により、鏡、馬具、武具等の豊かな副葬品が出土したことから、中期の有力な古墳として周知されている。さらに、本遺跡の東側に接して、全長99mの帆立貝式古墳である椿山古墳、

大塚越古墳がある。これらの古墳群は、中期における首長墓としての系列を考えることのできるものである。

奈良時代には遺跡の南西約1kmのところに、栗太郡衙と推定しうる岡遺跡がある。郡衙中心部の全容を現わしている全国でも有数の遺跡である。また、狐塚遺跡の西北約1kmに位置する手原遺跡は、ほぼ正南北の地割や古瓦の出土から寺院の存在が想定されていたが、近年の調査により企画性のある建物群が見つかった。岡遺跡と時期的にも通じることや、手原遺跡出土瓦と同範のものが岡遺跡にみられることから、両遺跡は密接に関わっていたと考えられる。狐塚遺跡はこれら両遺跡の中間地点にあり、律令期における栗太郡中心部に位置している。

昭和58年の本遺跡の調査は、11調査区の西側100mの地点で行われており、古墳時代初頭の沼沢地、平安時代の土壌墓のほか、縄文土器が10数点土壌中より出土し、包含層中よ





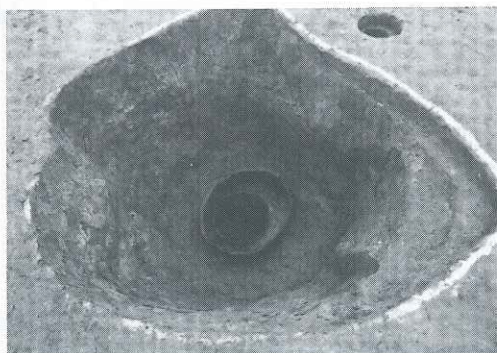
13調査区検出の屋敷跡。区画溝を伴ない、南隅には二脚門が設けられている。

り縄文時代の石器が出土しており、縄文時代の遺跡としても認識されることになった。

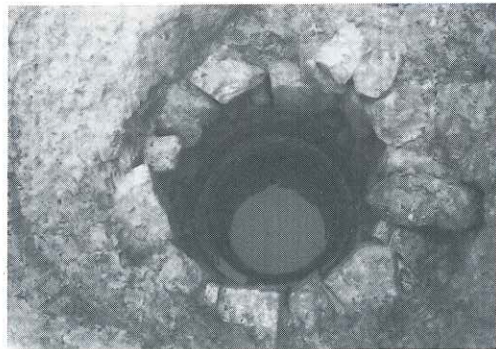
本年度は3地点で調査を行なったが、12、13調査区では、弥生時代末から室町時代に及ぶ遺構や遺物がみついている。とくに平安時代から室町時代の屋敷跡は、区画溝や土壇墓、井戸等を伴っており、その時期の屋敷の構造などを知る上で注目される。



屋敷に伴う区画溝。上層は意図的に埋められており、13世紀中ごろを下限とする。



上部に方形の板枠があった井戸。



区画溝埋没以後の井戸。

狐塚遺跡⑪

本調査地は、大字川辺字東浦429番地に所在し、宅地造成に伴い約800㎡の範囲で調査を行った。

調査区南側約200㎡は遺構がなく、削平をうけているものと思われる。上層の灰色粘土層下の黄色粘質土からは、縄文時代の石器が1点みつかっている。

北東側のやや低くなった部分からは旧河道と建物群がみついている。旧河道の幅は約28mで、落ちぎわから古墳時代初頭の土器が出土している。

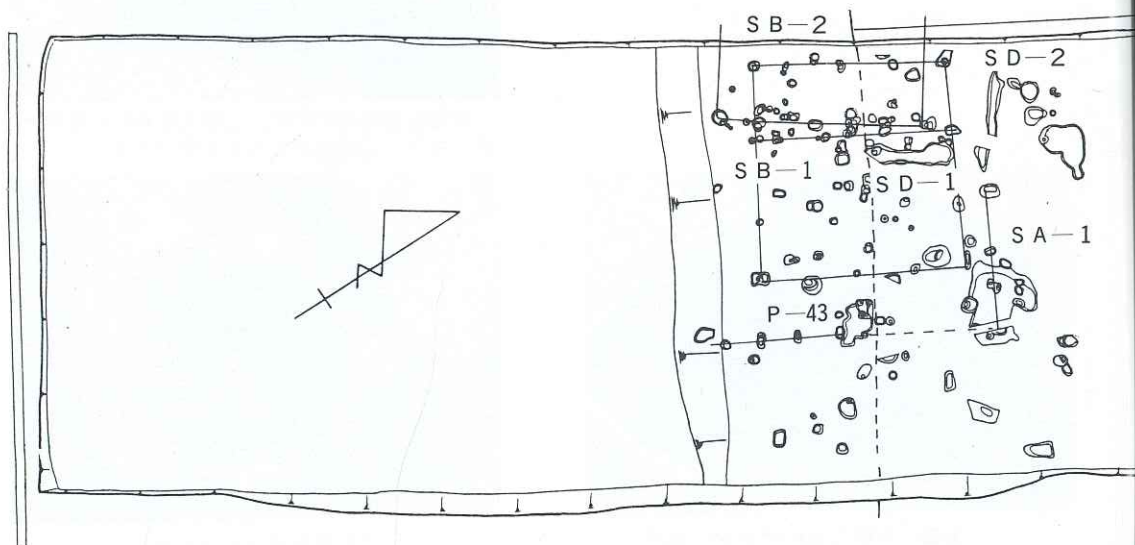
建物群は、鎌倉時代後期を中心とした時期のもので、2時期にわたって建てられている。I期は主軸をE-28°-Sにとる二棟(SB-1、3)で、区画溝(SD-11)をともなうと考えられる。I期の廃絶はSB-1の焼土や焦げた柱根などから、火災によるものと思われる。II期は主軸をE-33°-31°-Sにとる2棟(SB-2、4)で、これにともなう区画溝はやや北西に移動する。I期の区画溝は埋没し、石組の井戸(SE-1)が重複し

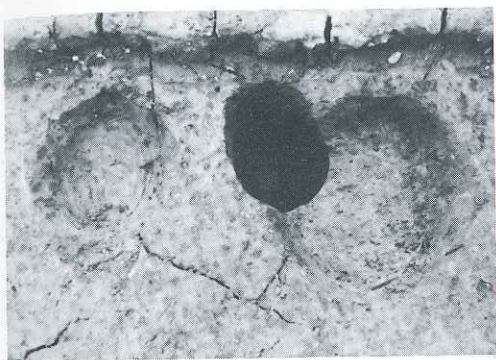
てつくられる。

これらの建物群は、SB-3にみられるように土間と床張りの間からなるものがあるなど、中世の建物の構築方法の多様さを示すものである。

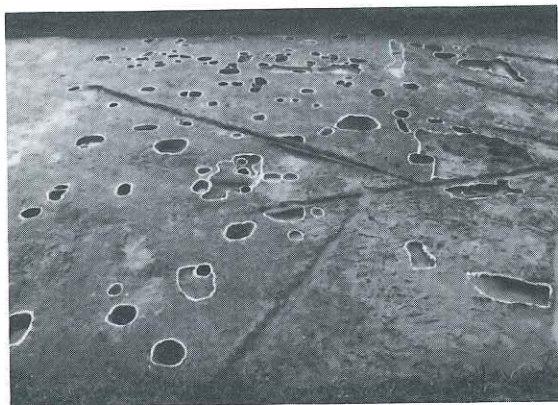
II期の井戸は、建物群の北東部にあり、掘り方は2.3mで石組の内法は0.7mである。石組の下は砂を掘り込んで高さ43cmの曲物が据えられていた。深さは遺構面下1.8mに達するが、井戸内には崩壊した石が埋まっており、石組はさらに数10cm高く組み上げられていたと考えられる。井戸内からは土師皿、東幡系須恵器鉢、瓦質・土師質羽釜等の土器や、曲物、下駄、箸などの木製品がある。下駄は台部に歯部を削り出した連歯式の高下駄であり、使用痕および補修痕がある。曲物は井戸枠に用いられていた大型のもの他、径約20cmの小型の曲物が、底近くより出土している。

11調査区において検出された中世の掘立柱建物や井戸は中世における屋敷の構造や、生活の様相を知る上で貴重な資料である。また、12、13調査区でも同時期の遺構があり、街道に近接した集落として、その広がりが注目される。

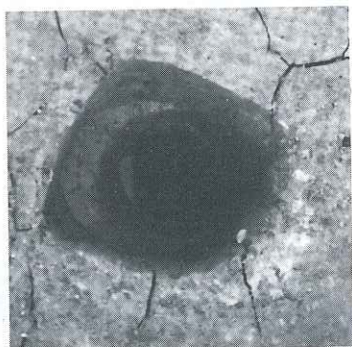




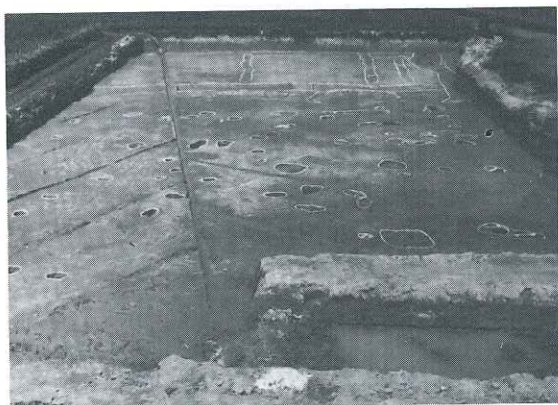
SB-4 (P-181) 柱穴。柱穴底から完形の土師皿が1枚出土している。SB-4には他にも同様の土師皿出土状況を示す柱穴がある (P145)。



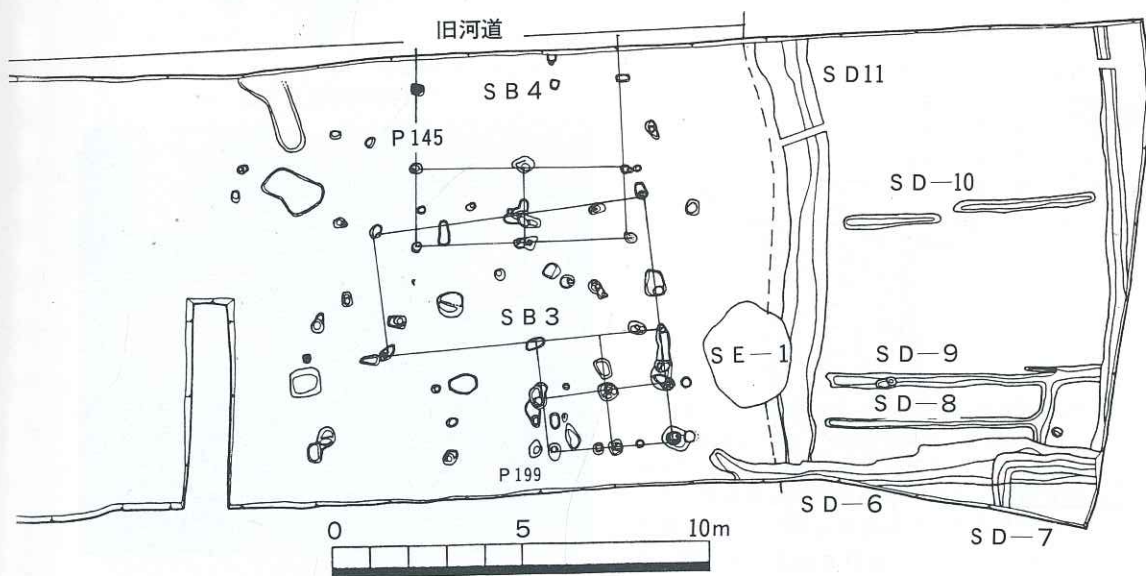
SB-1、2 付近



柱痕

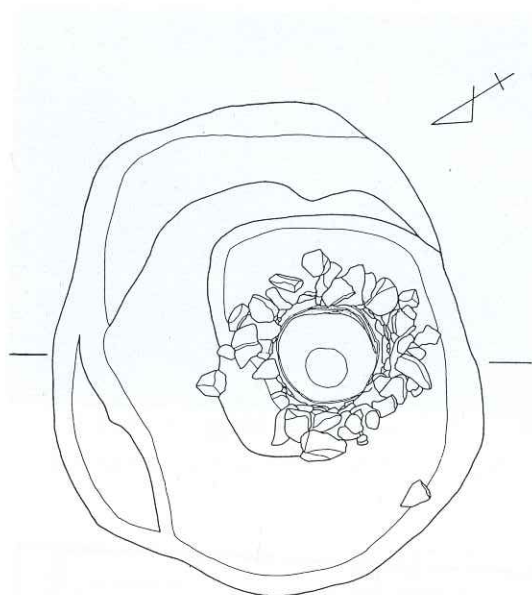
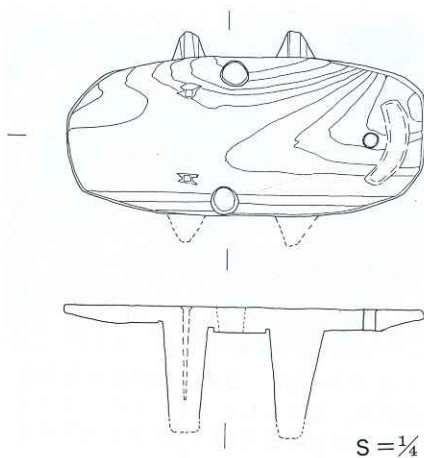


SB-3、4 付近

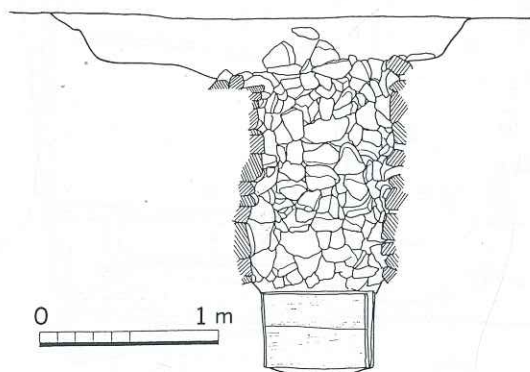




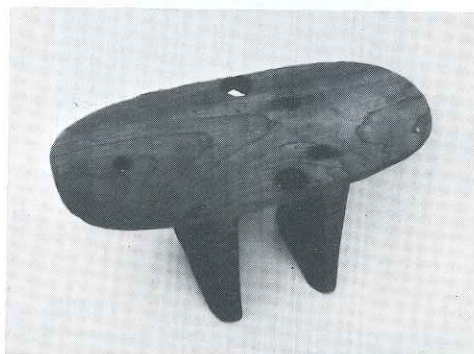
石組の井戸



103.00m



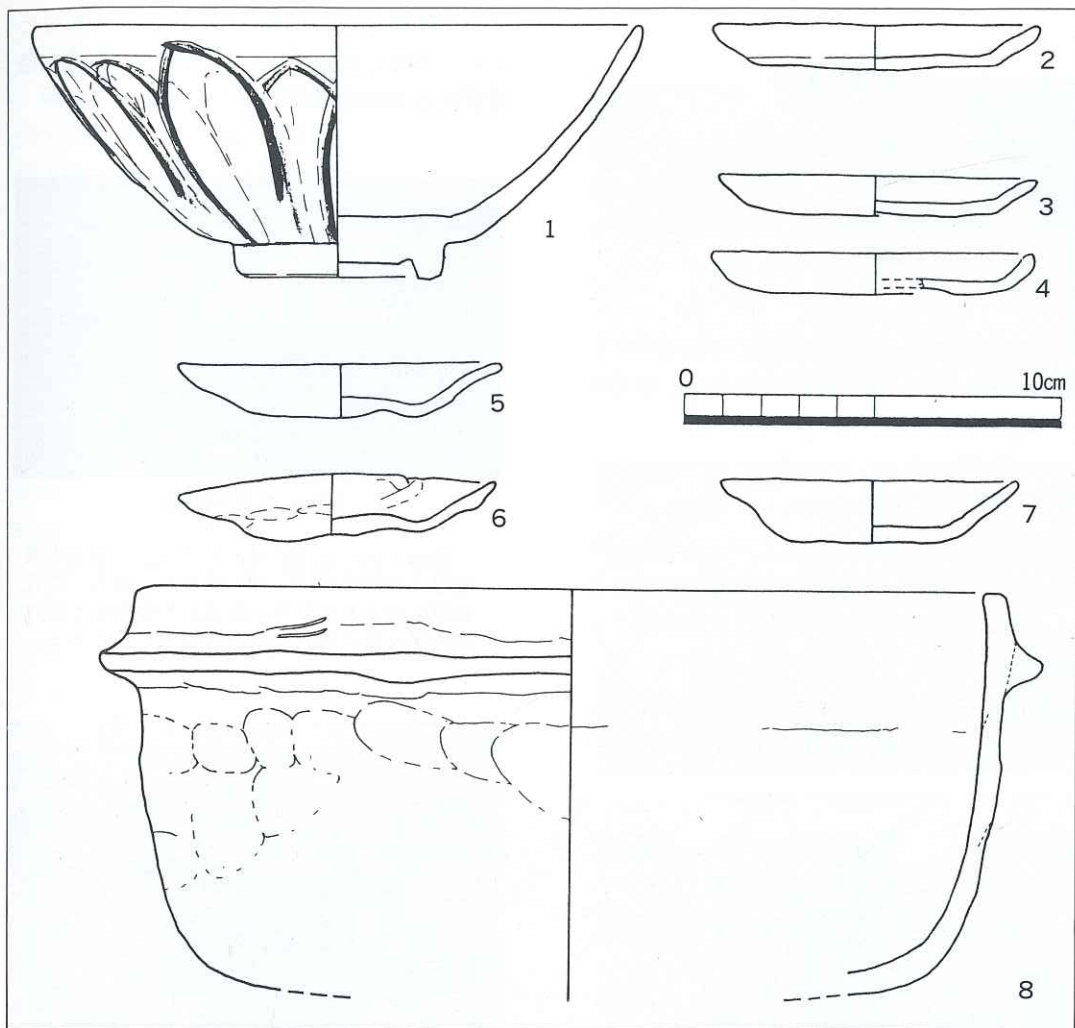
井戸実測図



井戸内出土下駄



井戸調査風景



- 1、2、SB-1 (P-43)
 3、SB-3 (P-176掘り方)
 4、SB-3 (P-176柱穴)
 5、SB-4 (P-145)
 6、SB-4 (P-181)
 7、8、P-199

SB-1 (P-43) から出土した青磁碗である(実測図1)。口径16.2cm、底径5.3cm、高さ6.7cm。外面は蓮弁を削りだしているもので、竜泉窯系の輸入磁器である。本調査区で発見された住居に居住していた人々の富裕さが窺えよう。

坊袋遺跡

坊袋遺跡は、栗東町の北西部に位置し、南側には旧東海道が通り、北側には葉山川が流れる。遺跡の南から西側にかけて遺構が少ないのは、川の影響によるものと考えられている。

第1次調査は、昭和61年度に今回報告する⑭調査区に隣接する南側で行なわれ、弥生時代中期後半の土壌、ピットの他、近世もしくはそれ以降と思われる旧河道を検出した。

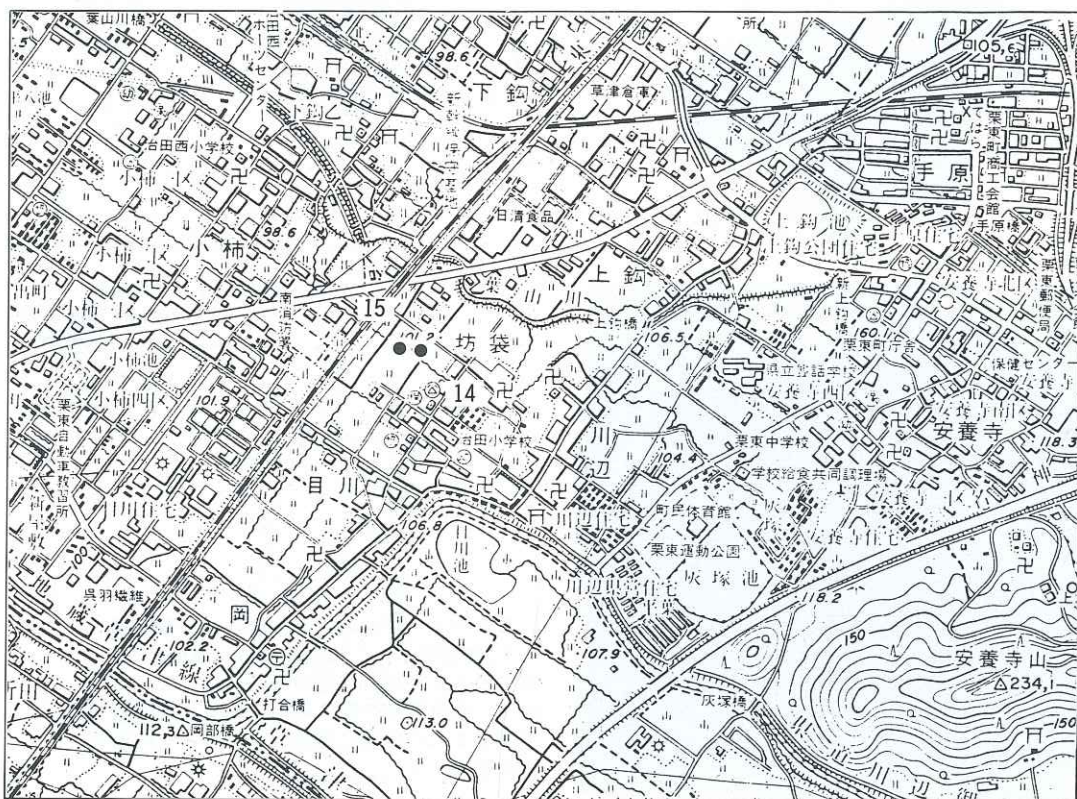
現段階では、今回の調査も含めて弥生時代中期後半から古墳時代初頭までの集落しか確認されていないが、調査区の東側で平安時代から鎌倉時代にかけての貨銭（元豊通寶、永樂通寶他3枚）を表採した他、集落内には、鎌倉時代後期の作といわれる阿弥陀坐像も存在していることや、莊園志料によれば、中世

に治田郷青地荘の荘域であったとされることから、今後の調査でこれらの時期の遺構が発見される可能性が高い。



昭和61年度の調査

検出された土壌のほとんどは、土器等の廃棄場に利用されていたと思われ、焼土、炭化物等も含まれていた。出土した弥生式土器は畿内第Ⅳ様式併行に比定されるものである。



⑮の調査区では、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての掘立柱建物5棟、堅穴式住居1棟、溝、土壇等が確認されている。

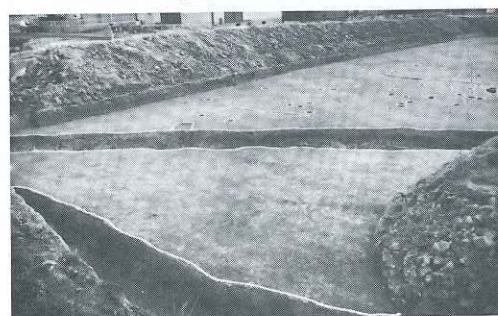
SD-1とSD-2は、ほぼ併行し東西方向にややカーブを描きながら存在している。両溝は、⑭の調査区へと続いており、集落のまわりを巡る溝と考えられる。

⑭の調査区では、弥生時代中期後半からの遺構が存在し、前述の溝2条の他、掘立柱建物3棟、柵列、焼土壇等が確認されている。南方向にピットが密集しているので、さらに建物が増加する可能性を残す。

遺物は、弥生式土器（畿内第Ⅳ～Ⅴ様式併行）、土師器（庄内式古段階併行が中心）、須恵器の他木製品（建築材、鋤、鋤）や石器（石鏃2点）も出土している。

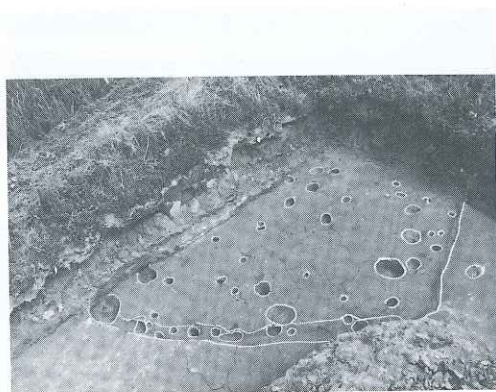


⑭地区作業風景

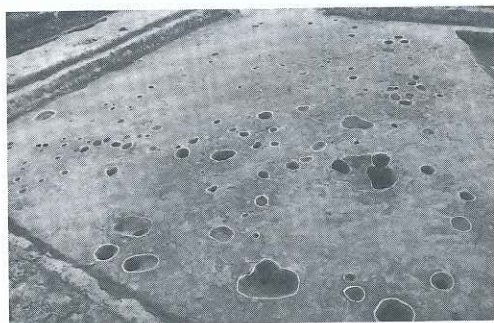


⑭地区・SD-1とSD-2(北から南方向をみる)

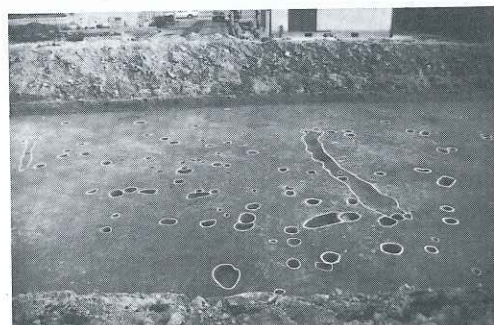
SD-1とSD-2は、同時期に存在していたことが考えられ、規模は幅2m前後、深さ40～60m強を測る。長さはSD-1で60m強、SD-2で40m強を検出している。



⑮地区・堅穴式住居

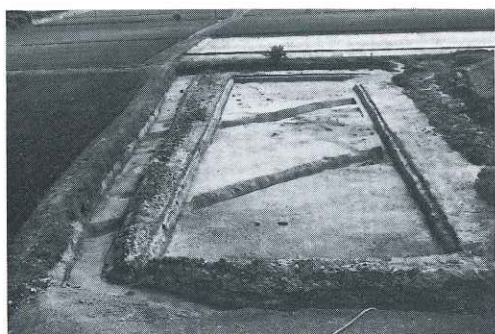


⑮地区・掘立柱建物

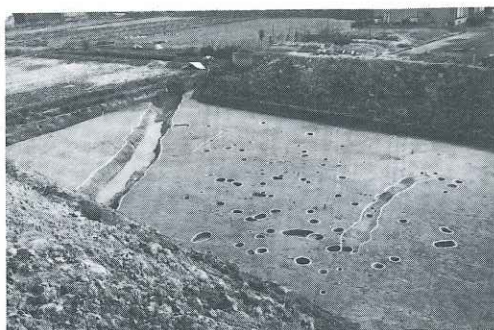


⑭地区・掘立柱建物

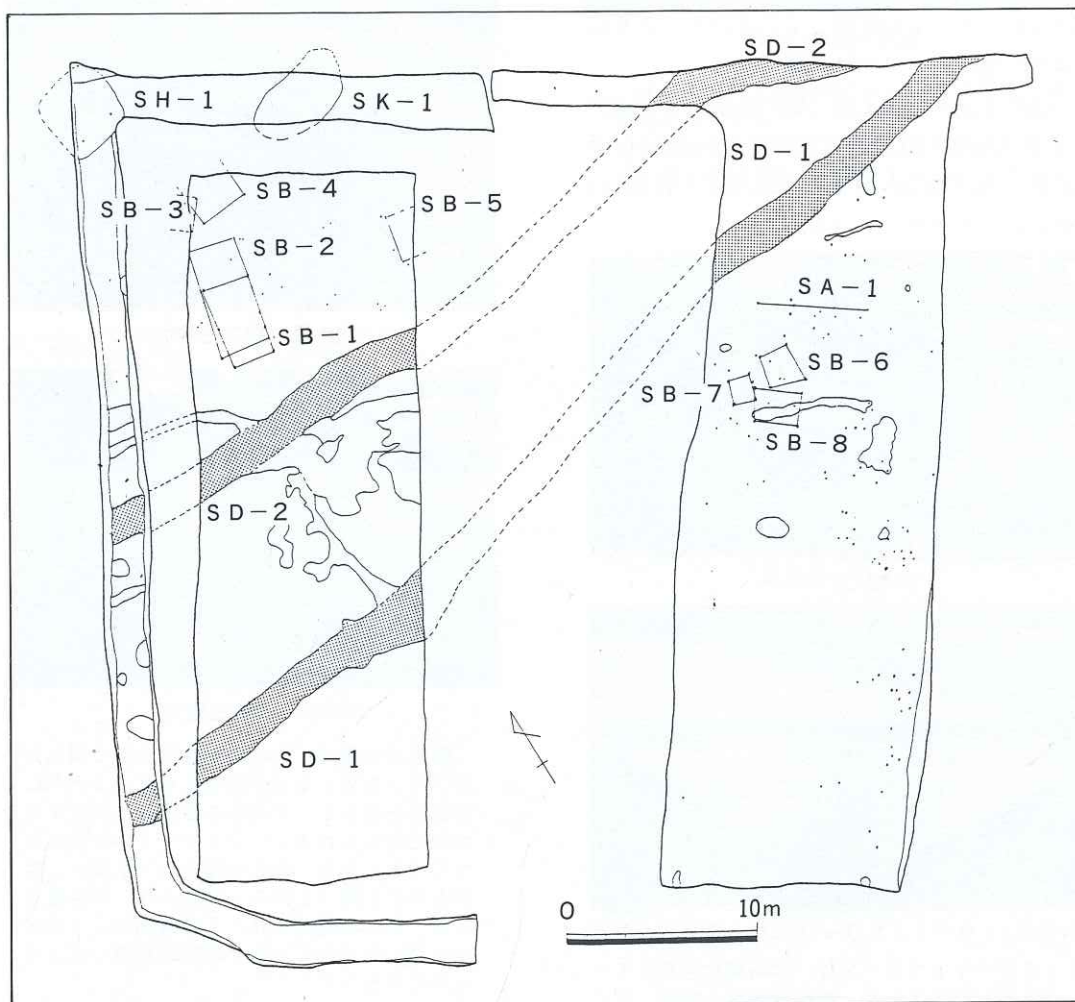
堅穴式住居は、4本の主柱穴をもつ隅丸方形プランを呈するものと考えられ、まわりには壁溝を巡らし、その中には壁材を固定するものと考えられる小ピットがいくつか検出されている。また、掘立柱建物は、1間×2間のものと1間×1間のものがあり、居住域もSD-2の北側とSD-1の南側の2つのグループに分かれている。時期的な違いによるものであろうか。



⑮地区調査地全景



⑭地区・(西から東を覗む)



遺構配置図 (左が⑮調査区、右が⑭調査区)



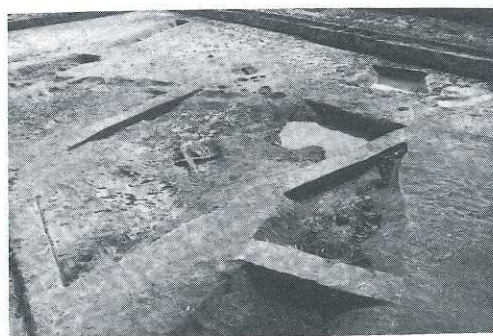
⑮地区・SK-1 木器出土状況



⑮地区・SD-2 遺物出土状況近景



⑮地区・SK-1 鋤・鍬出土状況



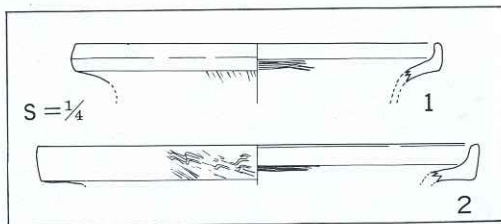
⑮地区・SD-2 遺物出土状況（東から西方向）

SD-2の北側に存在する住居に住んでいた人たちが、廃棄場として利用していたことが考えられる。土器の時期は、庄内式併行の古段階に位置づけられよう。



⑮地区・SK-1 建築材出土状況

木器を出土したSK-1は、全体のプランを検出できなかったが、検出できた幅で2～3mを測り、推定で4m以上の楕円形を呈する土壌になると考えられる。深さは80～100cm前後を測る。時期は弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての時期が考えられる。



⑭調査区の掘立柱建物が集中する付近で出土した受口状口縁を呈する甕の破片である。1は内、外面ともにハケ目調整で、2は外面ハケ目調整の後、クシによる波状文が施こされている。内面は1同様ハケ目調整である。

小柿遺跡

小柿遺跡は、葉山川流域の沖積平野に位置する。縄文時代から中世におよぶ遺跡で、近年の調査により姿を現しつつある。

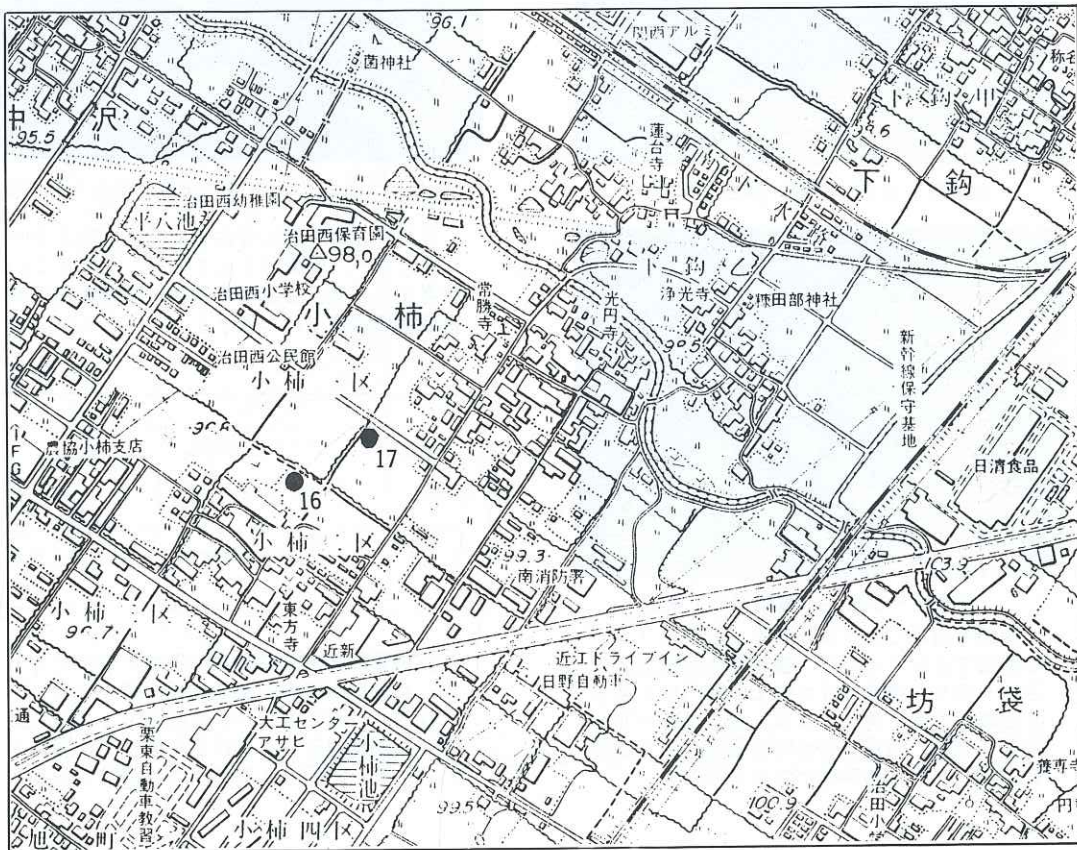
遺跡の東側には弥生時代中期から開始する下鈎遺跡が隣接し、流路や溝から豊富な遺物が出土している。また、北西に接しては、草津市との間にまたがる中沢遺跡があり弥生時代前期の遺物を出土する遺跡として知られる。これら両遺跡は、弥生時代の農耕の派及を考えていく上で、重要なポイントとなっている。小柿遺跡は、両者の中間南寄りに所在している。

本遺跡の過去の調査では縄文時代の石器が発見されるなど、町内では数少ない縄文時代の遺跡の1つである。

弥生時代になると、本年度17調査区の北西隣である昭和57年度調査区において、弥生時代後期の方形周溝墓がみついている。

古墳時代のものとしては、遺跡地内に小槻古墳群と称し、古墳9基の存在が伝えられている。これは17調査区の北側にあり、現在は墳丘も認められず、実体は不明である。これに対して、前述した昭和57年度調査区では、古墳時代後期の方形周溝状遺構がみつかり、周溝からは円筒埴輪が出土しているなど、古墳の可能性が高いと思われる。この時期の他の遺構としては、流路や溝がほとんどであり、16調査区でも古墳時代の流路がみつかり、槽や欵などの木製品や土器など多くの遺物が出土している。

奈良時代以降の遺構としては、昭和57年度調査区及び16調査区において、平安時代後期の掘立柱建物跡が検出されている。



小柿遺跡⑬

本調査地は大字小柿字下角屋に所在し、倉庫建設に先立ち、600㎡の範囲で調査を実施した。

主な遺構には、弥生時代末から古墳時代後期にわたる自然流路、土壌の他、中世の掘立柱建物がある。

弥生時代末から古墳時代中期にわたる流路(旧河道2)は幅16.5m(本流部分は6.6m)、深さ1.35mで東西方向である。非常に多くの遺物を包含していた。最下層は弥生時代末から古墳時代初頭、木製臼が出土している。下層は古墳時代初頭を中心とする時期で、木器が多く出土した。中層は古墳時代中期の推積で、出土遺物中に高杯、小型丸底壺の占める割合が高く、土師器の碌や手づくね土器など祭祀関連遺物も出土している。上層は須恵器を伴出し、土師器が多く出土している。また、滑石製の有孔円盤が出土するなど、古墳時代中期における祭祀に関わるものと思われる。

古墳時代後期の流路には調査区南側でみつかったもの(旧河道3)と北東側のもの(旧河道1)があるが、北東側の流路からは、碌や提瓶をはじめとする須恵器、土師器が出土した。

旧河道2北側のSX-1は、プランは不明であるが、下層は旧河道2中層と同時期で遺物構成も類似し、両者の関連が考えられる。



作業風景

旧河道出土の遺物については、特に旧河道2中層、上層にみられるように、祭祀に用いられたと考えられる遺物が多い。農耕に必要な水を供給し、しかも変化することの多い自然流路に対する祭祀にかかわるものと思われる。推積が長期にわたるものであり、今後の整理を通じて、祭祀の変遷を考えていく試みも可能であろう。

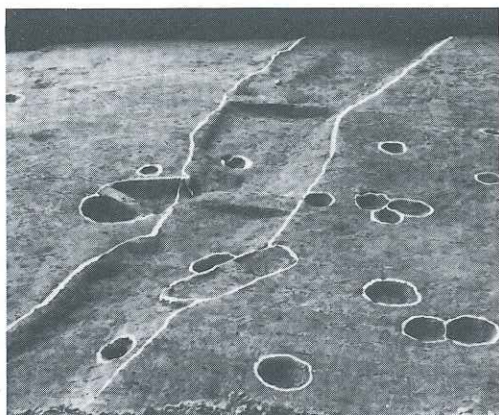
中世の遺構としては、2間×1間以上の掘立柱建物を検出し、主軸方向はN-33°-Wである。柱穴より黒色土器片が出土している。

北西に隣接した昭和57年度調査区で想定された墓域は本調査区旧河道1以南の流路域までで終わっている。また旧河道1の遺物は古墳の副葬品の器種構成に似かよっており、北西側の周溝状遺構と时期的にもあうことから、北西側からの流入が考えられる。

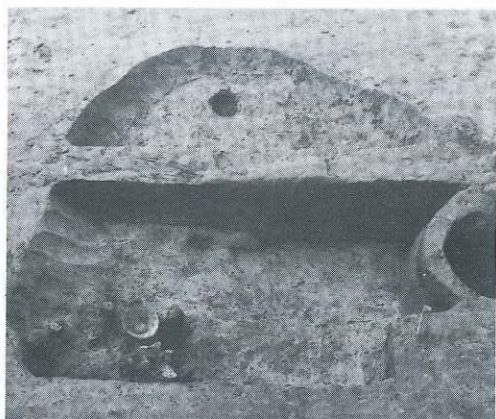
調査区全体から、コンテナ70箱に及ぶ豊富な遺物が出土したが、これに伴う集落は近辺には見つかっておらず、今後の問題として残されるであろう。



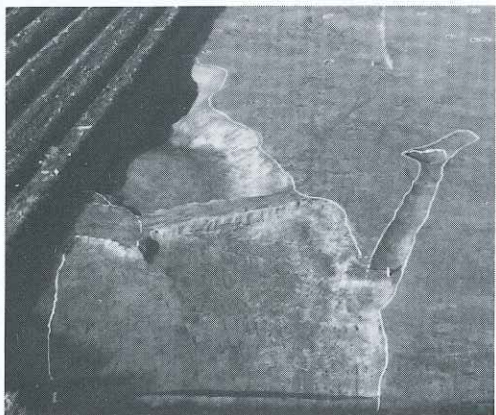
調査区全景



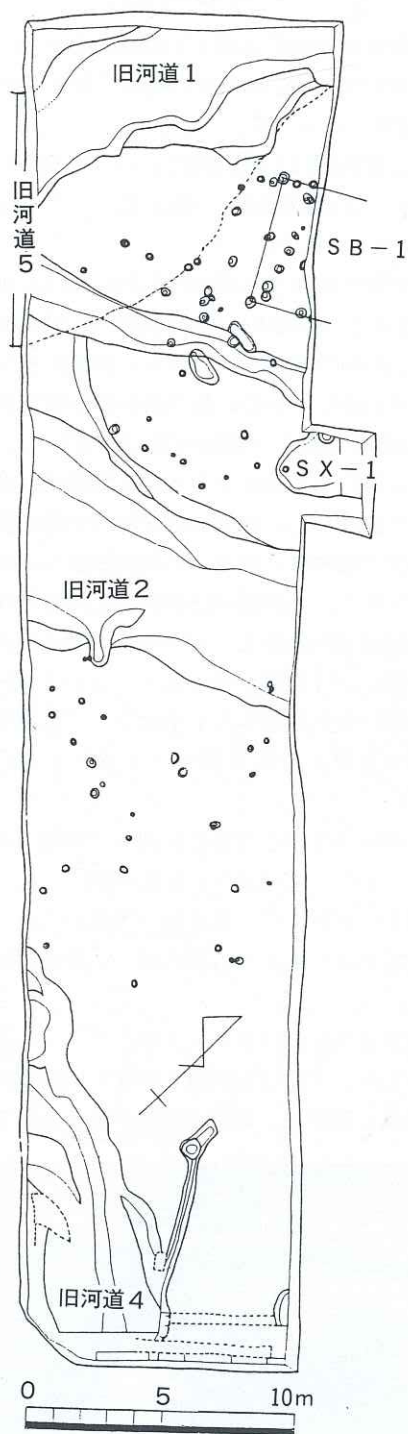
ピット、SD-1



SX-1



旧河道

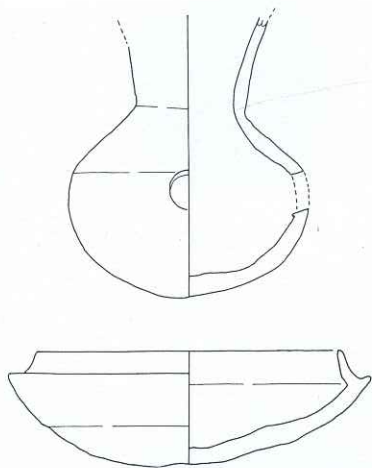


遺構全体図



旧河道 1 出土遺物

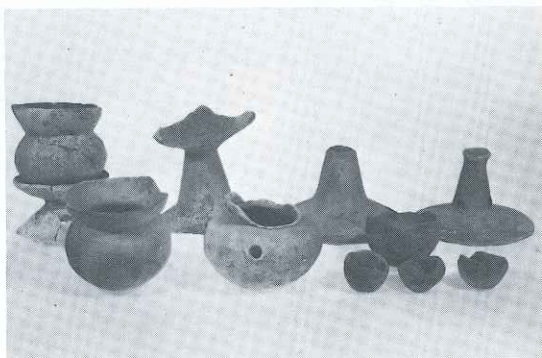
旧河道 1 は、浅い流路に砂が堆積していたが、砂層中より須恵器の罌、提瓶、甕、坏身や、土師器片が出土している。



旧河道 1 出土須恵器



旧河道 2 中層



旧河道 2 中層出土遺物

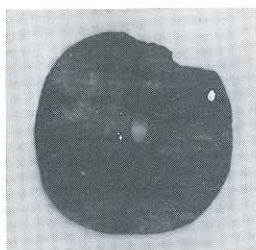
旧河道 2 中層からは非常に多くの遺物が出土した。高坏の出土量が多く、手づくね土器があり、土師器罌があるなど、祭祀に関わるものと考えられる。



旧河道 2 最下層出土遺物



旧下道 2 最下層



木製紡錘車



木錘



農耕具の柄



▲鋤▶



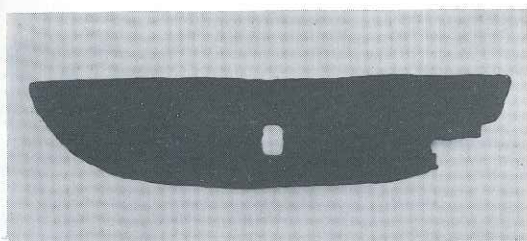
最下層出土の臼

▼堅杵

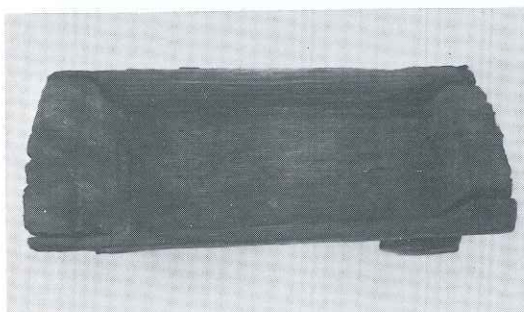


臼は最下層から、堅杵は下層から出土した。臼の高さは48cmで、中心部がくびれ、上部に半球状の割りこみがある。堅杵は長さ86.5cmと93.5cmであり、西日本で一般的にみつかる古墳時代の堅杵より、やや短いものである。

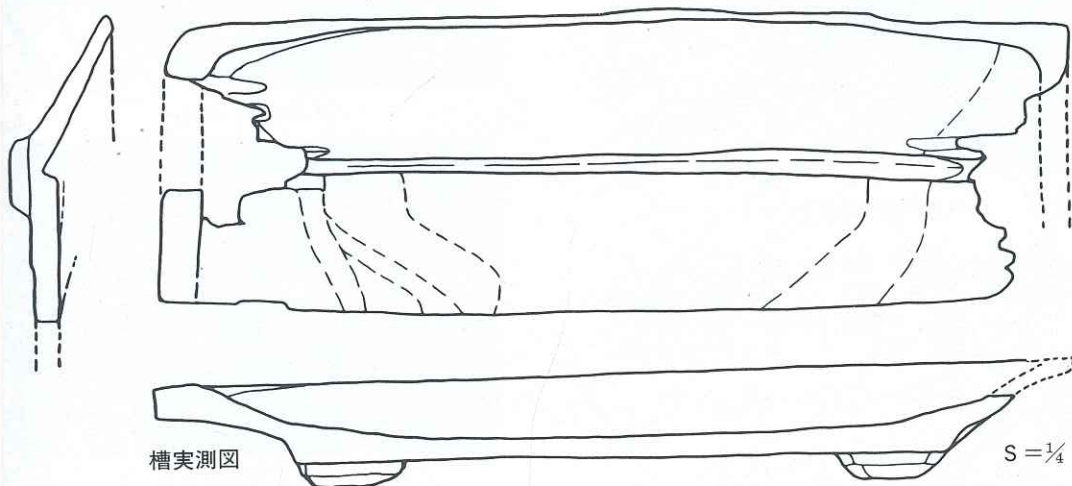
旧河道2
下層出土の
木製品



ホゾ穴のある木製品



槽▶



槽実測図

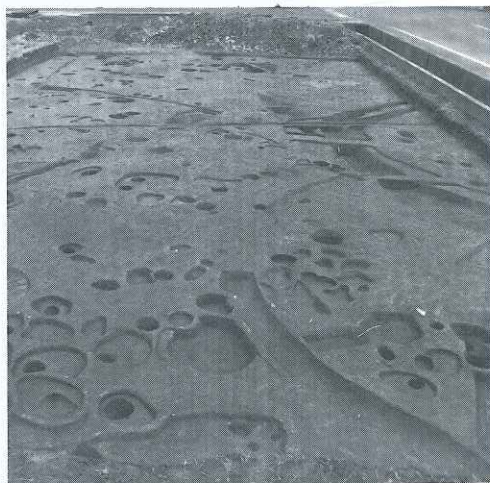
S = $\frac{1}{4}$

下鈎遺跡

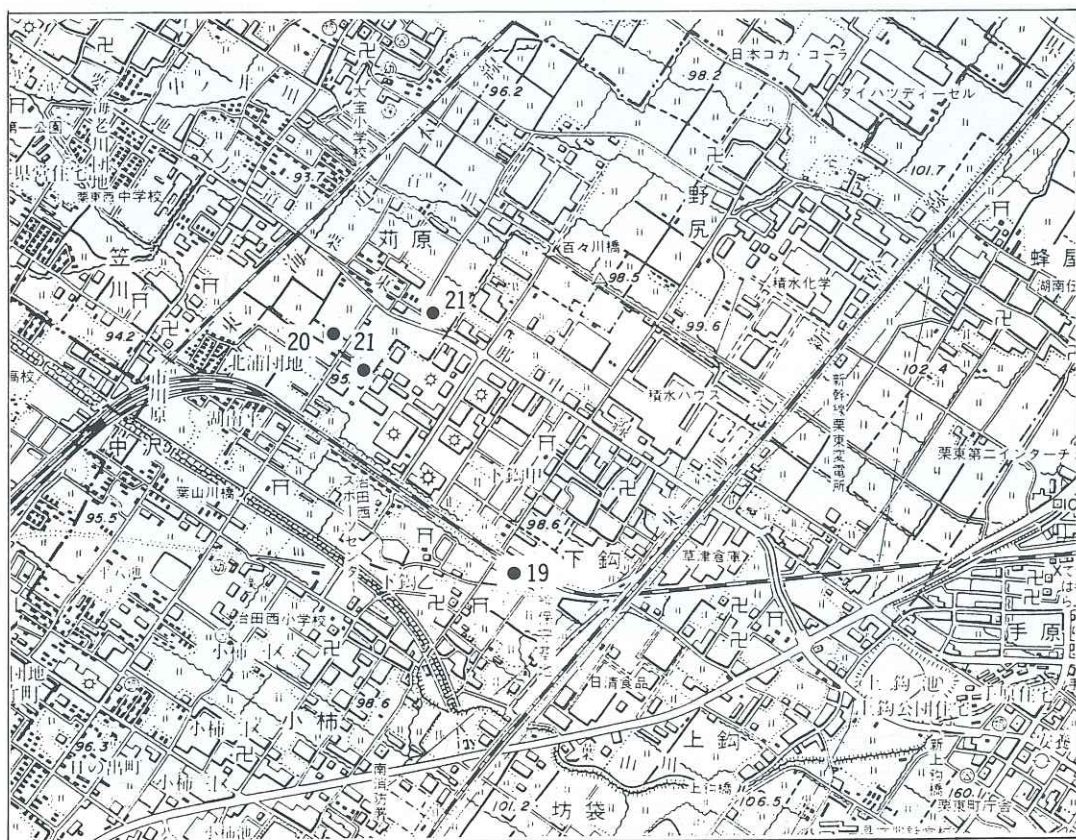
下鈎遺跡は、栗東町北西部の葉山川流域に位置している。

過去の調査では、弥生時代から鎌倉時代にかけての遺構が確認されている。特に注目されるのは、弥生時代中期後半（畿内第IV様式併行）に造られた環壕ではないかと思われる、V字状に掘り込まれた溝が昭和58年の調査では遺跡の南端付近で、昭和61年度の調査では東寄りで確認された。規模は幅約3m、深さ約2mを測る。その溝が巡ると考えられる外側には方形周溝墓も確認され、また柱の掘方平均75cm、柱間平均260cmのほぼ等間隔で3間もしくは3間以上をもつ大規模な掘立柱建物も確認されている。出土遺物では、ひすい製の勾玉、銅釧などの装飾品が注目される。

近年の調査では弥生時代後期末から古墳時代にかけての遺跡が多く確認されているが、居住域が確認されることは少なく、流路や沼沢地が全時代を通して多かったようである。



昭和62年度調査（掘立柱建物群）



②0調査区で検出された遺構は、多量の土器を出土した弥生時代後期から末期にかけての流路（沼沢地）と時期不明の鋤跡を確認することができた。

流路は、調査区内にすっぽりおさまっている状態で、肩の部分を確認することができなかった。現段階で全長47m以上を測り、深さは深いところで1m前後、浅いところで60～70cmを測る。C地区の隅では、62年度調査で確認されていた土器群の続きが、かろうじて一部ひっきり、推積状態および土器の出土状態もほぼ同じであった。流路は中央にいくほど深くなる傾向にあり、土器はほとんど含まれておらず、有機物のみである。また、調査区の南から東（AからE）にかけて、幅約2m～4m強（平均3m前後）、深さ約10～20cmの砂層の流れこみがあり、土器が多量に含まれていた。検出できた長さで約15m強にわたっている。

出土遺物は、弥生時代後期後半から末期にかけての土器と古墳時代初頭の土器が中心で

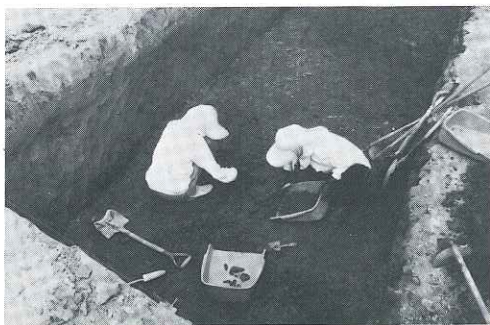
壺、高杯、器台、鉢、甕等があり、ほとんどの器種がそろっている。



A～C区全景（CからE方向をみる）



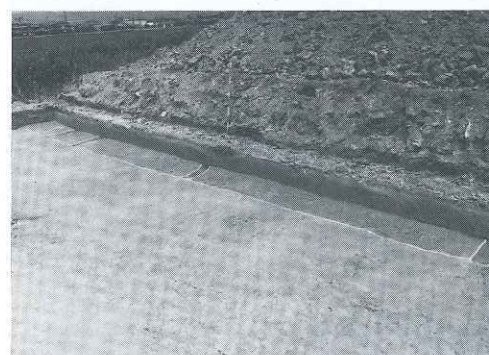
D・E区全景（DからE方向をみる）



A区周辺作業風景

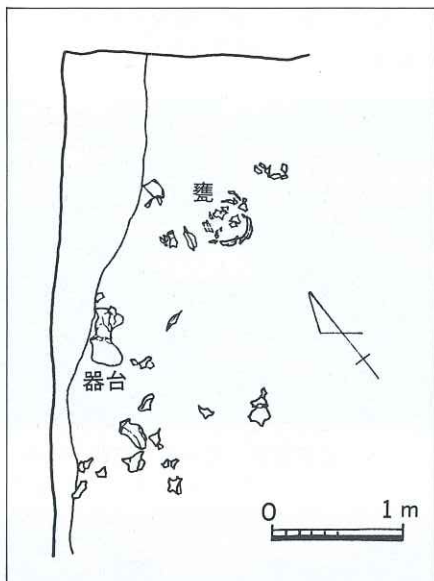


D区土器群出土状況

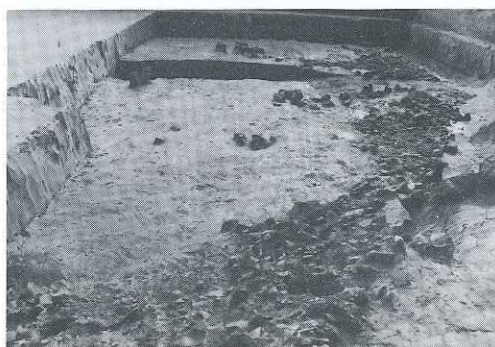


S R-1・上層面鋤跡遺構

S R-1上層面で確認した鋤跡は、全部で10条あり、幅約20～40cm、深さ5～15cmを測る。一部では1.2m 前後の等間隔になっているところもある。



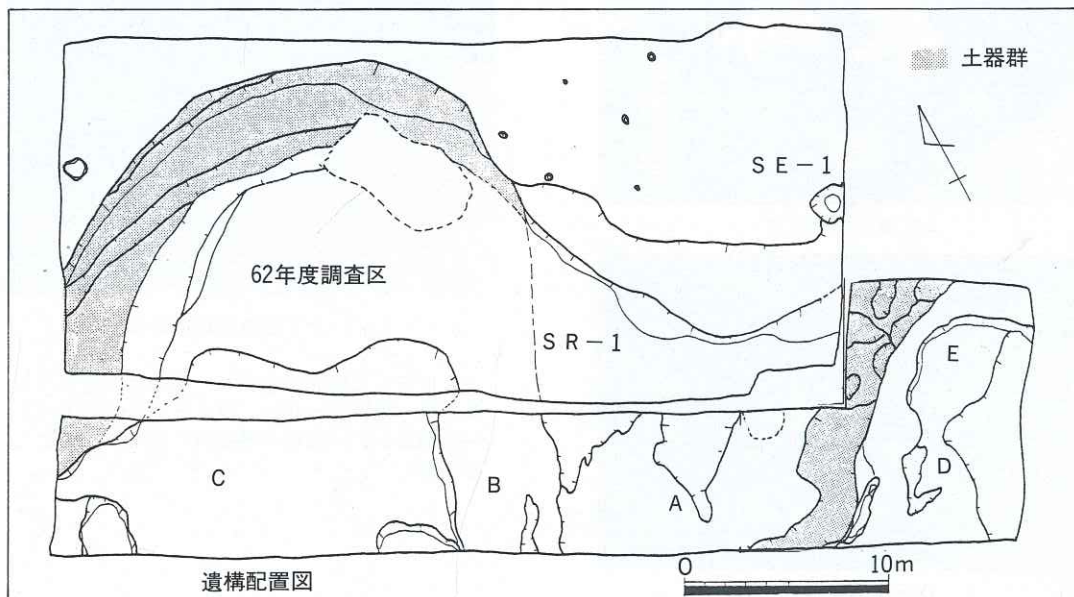
C区土器群遺物出土状況



昭和62年度の調査



上は、SR-1を北から南方向をみた全掘状況で、下は、その遺物の出土状態である。遺物は、幅2～4m、長さ30m近くにわたって検出され、廃棄場として使用されていたことが考えられる。



遺構配置図

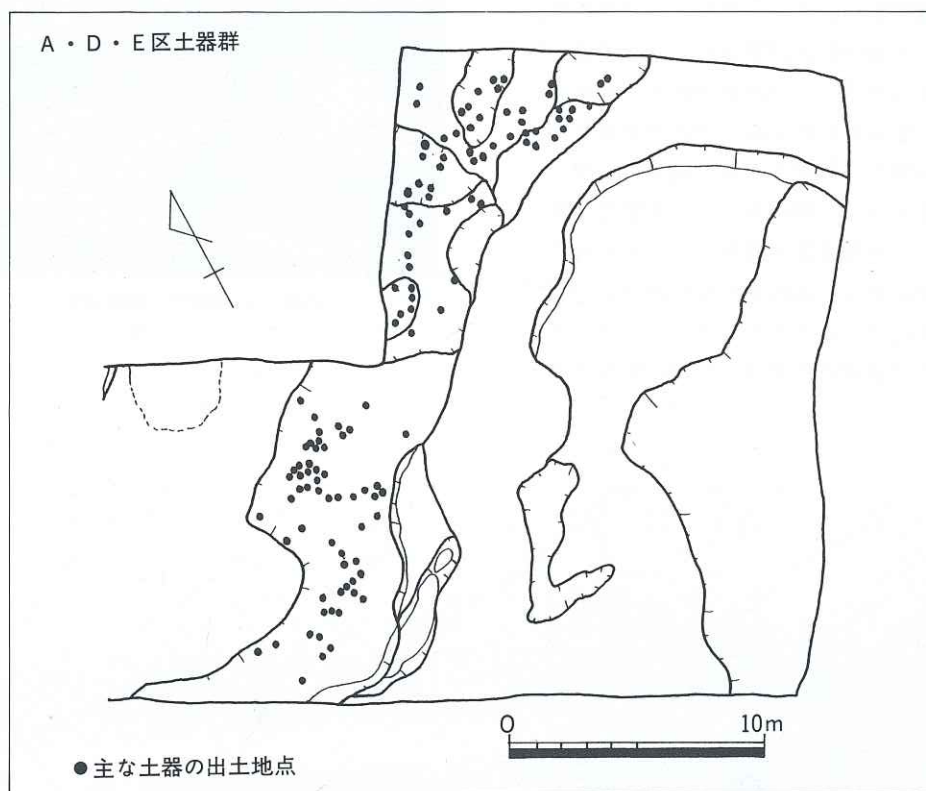


遺物出土状況（南から北西方向をみる）

A
区
土
器
群



遺物出土状況近景



壺の出土状況

D
・
E
区
土
器
群



遺物出土状況（西から東方向をみる）

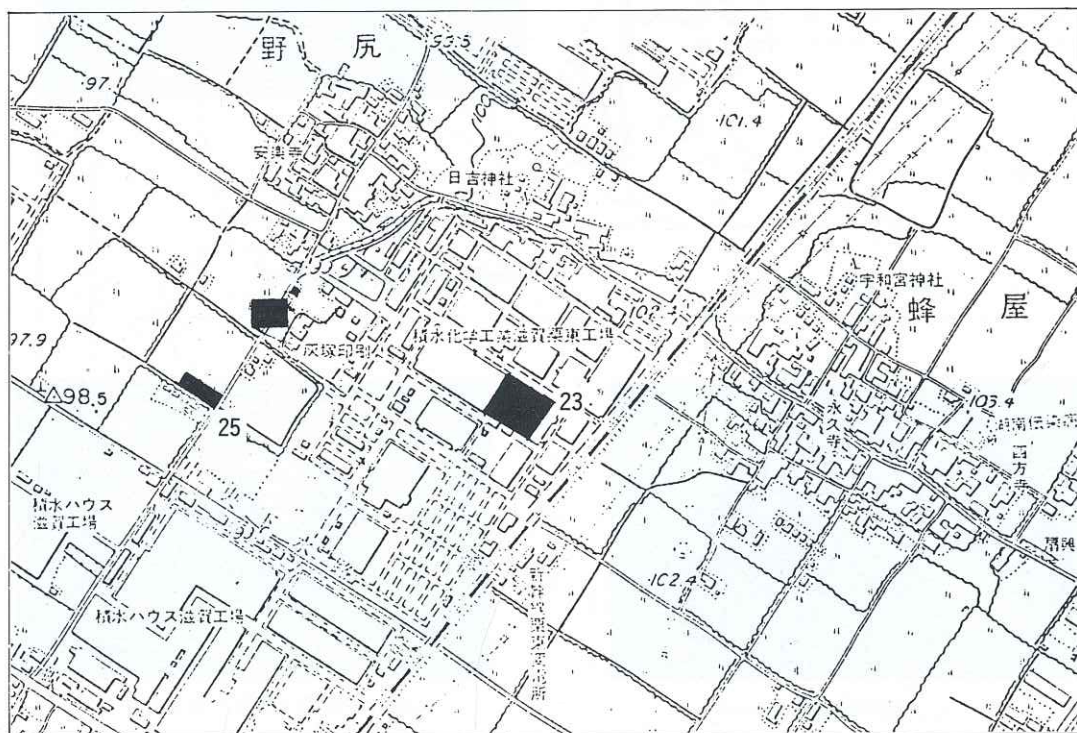
野尻遺跡

本遺跡は野洲川によって形成される扇状地上にあって標高約100m、およそ中ノ井川を北限とし東を蜂屋遺跡、南を下鉤遺跡、西を糺遺跡に接する区域をさす。現在までの調査結果からは、縄文時代後期の時期の土器を包含する流路を最古とし、近世に至るまでの間の遺構が知られるが、取りわけて弥生時代後期から古墳時代の時期にかけての遺構が数多く検出される。この時期で数多く検出される流路はおおむね琵琶湖の方に向き最下層に砂礫が堆積し、その上を厚く腐植土を含んだ粘土が埋めつくす様相を示し、木製鋤、鍬をはじめとする農具類を包蔵する。また数次の試掘調査結果では遺跡地西側には沼沢地が広い範囲を占めていたようであり、こうしたことからこの遺跡は生産域としての性格をきわ

だたせている。勿論住居域として集落跡が存しなかったということではなく、図中1の地区やAの地区で古墳時代中期から後期の時期の竪穴式住居跡が検出され、本遺跡西端の地区にも竪穴式住居跡が検出されている。しかし検出された住居跡は住居域として考えれば東接する蜂屋遺跡、南接する下鉤遺跡の住居域の一部を占めるものと解される。



流路（古墳時代・調査地②）



野尻遺跡 ②③

本調査地は野尻遺跡東端に位置し、北側に中ノ井川、東側に蜂屋の宇和宮神社が約300mの距離で近在する。宇和宮神社周辺には蜂屋古墳や赤子塚古墳とされる平野部に立地する古墳群があったと伝わる。また、奈良時代物部郷に開基されたとされる蜂屋寺もこの付近に想定されている。

調査地は現存する工場敷地であり、倉庫棟他が建っている部分を改築工事に先立って調査した。従って多く埋設物が存し破壊された部分や調査ができなかった部分も生じたが古墳時代前期から現代に至るまでの遺構を検出できた。

古墳時代前期の遺構は調査区北西側で検出された溝状の遺構である。弧状の溝で幅約1.5m、深さ30cmを計る。溝内からは甕や壺などが出土したが、この遺構の性格については明確でない。

古墳時代中期から後期の時期の遺構は後世の削平や遺構重複、攪乱をかなりこうむるが、竪穴式住居2棟、ピットが検出された。このほか周溝、柵列、掘立柱式建物で構成される一連の遺構もこの時期のものと思われる。周溝は方形に一巡し長辺で約50m、短辺で約40m、深さ0.3m程度を計る。溝西辺は攪乱されよくわからないが、東辺には掘りのこしたと見られる部分を認める。周溝の内区を形成する柵列は約30m四方に巡り幅約0.3mの溝状に布掘りされた後柱を埋め込んでいる。柱間は約1.5m内外である。柵列もまた東側で一端途切れ開口する。西側も方向がずれており閉じていなかった可能性がある。柵列に囲まれた範囲、約900㎡内には掘立柱式建物2棟、竪穴式住居2棟が検出された。掘立柱式建物は柱間3間×2間で約45㎡程の規模をもち柵列にそって2棟が軒先を並べる。竪穴式住居は柵列や掘立柱式建物と方位を異にするが一辺約4mの規模をもつ。床面まで2cm程度の遺存状況である。東側住居は中央に炉跡

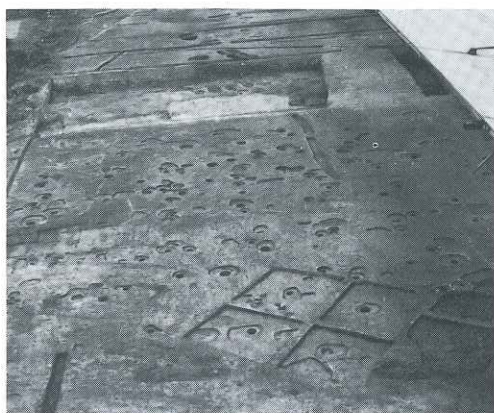


が見られ2ヵ所に貯蔵穴を有する。西側住居は北側壁付近がよく焼けているがカマドをもったものかはよくわからない。貯蔵穴は1基。これら2棟の住居は接しており建て替えと思われる。ピットは周溝と柵との間に1基、須恵器杯身、杯蓋を埋納するように検出された。このピットが存する部分は柵と溝との間隔が広く約14mにも達するが、ピット以外に同時期の遺構はみられなかった。出土する遺物は周溝内において壺、甕、須恵器杯蓋片が、竪穴式住居内からは東側住居床面上及び貯蔵穴内から須恵器有蓋高杯、蓋、杯身、杯蓋など、また西側住居床面上からは土師器甕片などが出土している。

このような遺構はその形状から見ると古代豪族の居館跡と考えられている兵庫県松野遺跡に類似している。また、近隣には蜂屋古墳等平地の群集墳も存したとされており本遺跡もまた古代豪族の居館跡である可能性が極めて高いと言えよう。

白鳳期から奈良時代にかけての時期の遺構は調査区東端で検出された幅約4mの溝がある。溝内からは多量の土器とともに平瓦、硯、不明銅製品が出土する。

本調査では古墳時代及び白鳳～奈良時代の時期に栗太郡に存した古代豪族を知る上で重要な遺構を確認することができた。本遺跡一帯を古代の物部氏と関係づける見方もあり今後の調査や本調査成果の整理によって解明してゆきたい。尚、平安時代以降の掘立柱建物群については概要を割愛した。



柵で区画された部分、手前は竪穴式住居
(古墳時代他)



柵列及び掘立柱式建物



溝。弧状に湾曲する。(古墳時代前期)



0 10m

野尻遺跡②④

栗東町大字野尻 223—4 他における、倉庫建設及び造成工事に先立ち発掘調査した野尻遺跡の調査概要である。

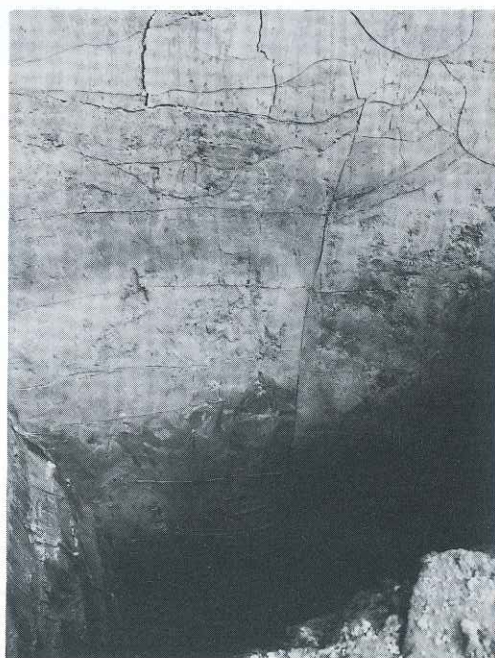
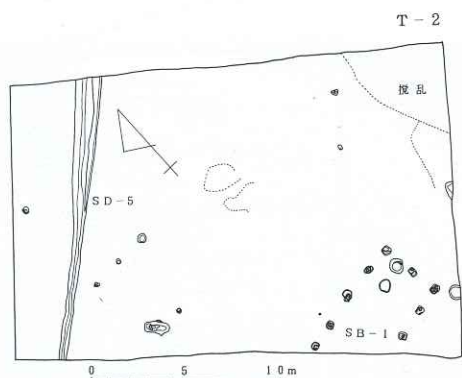
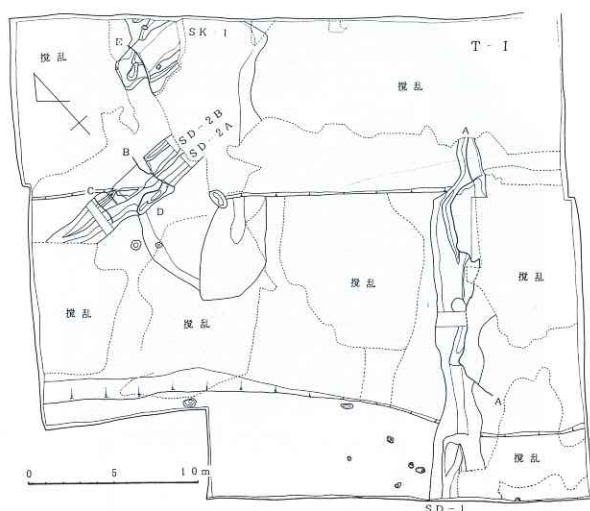
今回の調査では、溝、土層、建物跡、地震痕などが検出された。とりわけ地震痕は、数カ所の小規模な断層となって検出されている。昭和63年9月16日より10月18日までの期間を要した。

トレンチ 1

断層：地山面ではほとんど見分けがつかなかったが、遺構の部分ではプランが不規則にずれ、また、土層が分断されるため検出は容易であった。AはSD—1を縦断し、東側が10cm～40cm陥没する。Bは東側が30cm、Cは西側が10cm陥没する。つまり、B・C間が隆起することになる。Dは溝底に生じた亀裂で、深さ110cm以上を測る。EはSK—1を横断し、東側が50cm陥没する。遺構の層序はきれいにずれしており崩落痕が見られないことより、地震は遺構が埋没してからのものと思われる。

SD—1：幅約2m、長さ20mにわたって検出された。北側は深い攪乱により消失している。溝のほぼ中央を断層Aが貫いており、深さは一定ではないが平均すると東側が80cm、西側が85cmで、中央部は20cmを測る。周辺の地形からすると、北側の中の井川方向へ流れたと思われるが、中央部が浅くなっていることより、排水溝以外の性格も考えられる。方向は付近の地割りに沿う。出土遺物から、平安時代の中頃と思われる。

SD—2A：ほぼ正東西方向の溝で、幅約1.2mである。東・西側に攪乱があるため一部分だけの検出である。2カ所で断層が横断し、また、南側は、亀裂によると思われる狭い落込みがある。深さは、Bの東側で50cm B・



SD—1 断層 A

C間はほとんど痕跡だけ、Cの西側は、40cmである。

SD-2 B : SD-2 Aに切られる。幅は約1.2m深さは35cmを測る。埋土は暗灰褐色粘質土でSD-2 Aに似る。

SK-1 : 幅2.6m深さ90cmの土壇状の遺構で東側は深い攪乱で切られる。あるいは東側へ延びる溝の可能性がある。埋土は、上層は褐灰色粘質土、下層は青灰色及び暗灰色粘質土である。奈良時代の遺物が出土している。

トレンチ 2

SB-1 : 2間×4間以上の東西棟の建物

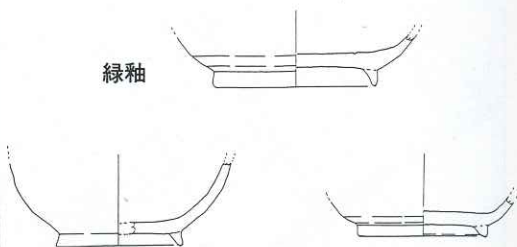


SD-2 SK-1

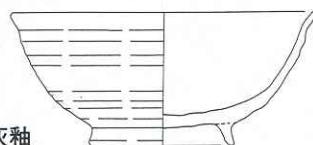
跡で、3.4m×6.3m以上を測る。堀方は、約50cmの隅丸方形を呈しており、柱穴は直径15~20cmを測る。建物の方位はE-12.5度-S(N-12.5度-E)である。遺構の時期を明らかにしうる出土遺物には恵まれなかった。

野尻遺跡は弥生時代から中世まで続く集落遺跡として位置付けられているが、今回の調査でも、6世紀から平安時代中頃に至るまでの遺物と、奈良時代から平安時代の遺構が検出された。また、地震の痕跡が発見されたのは町内では初めてで、今後の調査に貴重な資料を得ることができた。ただし、その時期を特定することは難しく、遺構の埋没後の11世紀以降であることが判明したにすぎない。

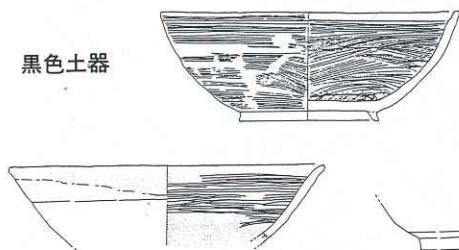
緑釉



灰釉



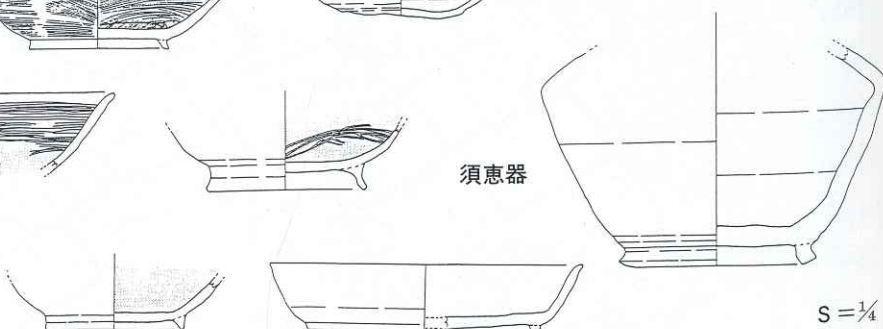
黒色土器



土師皿



須恵器



S = 1/4

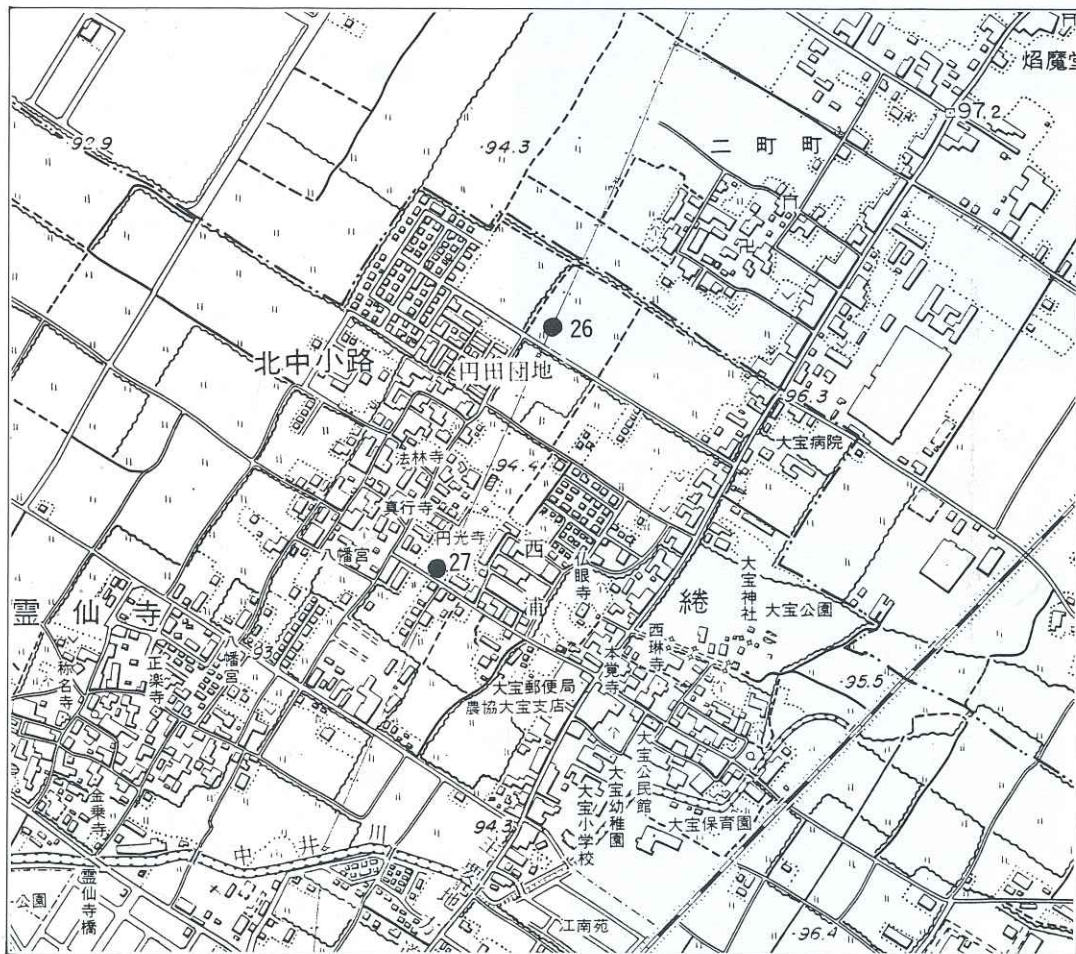
緒遺跡

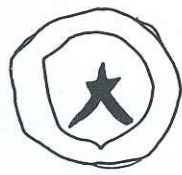
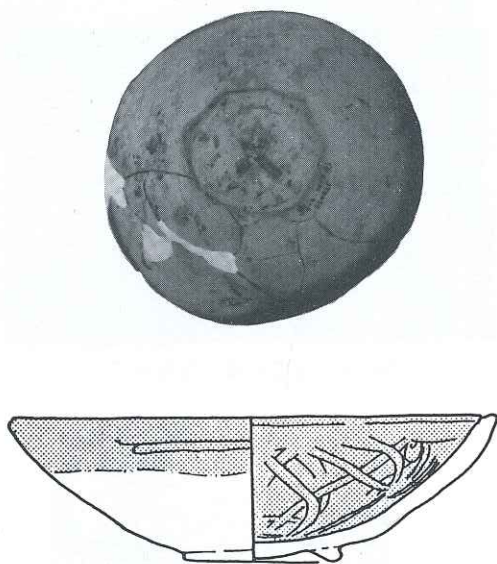
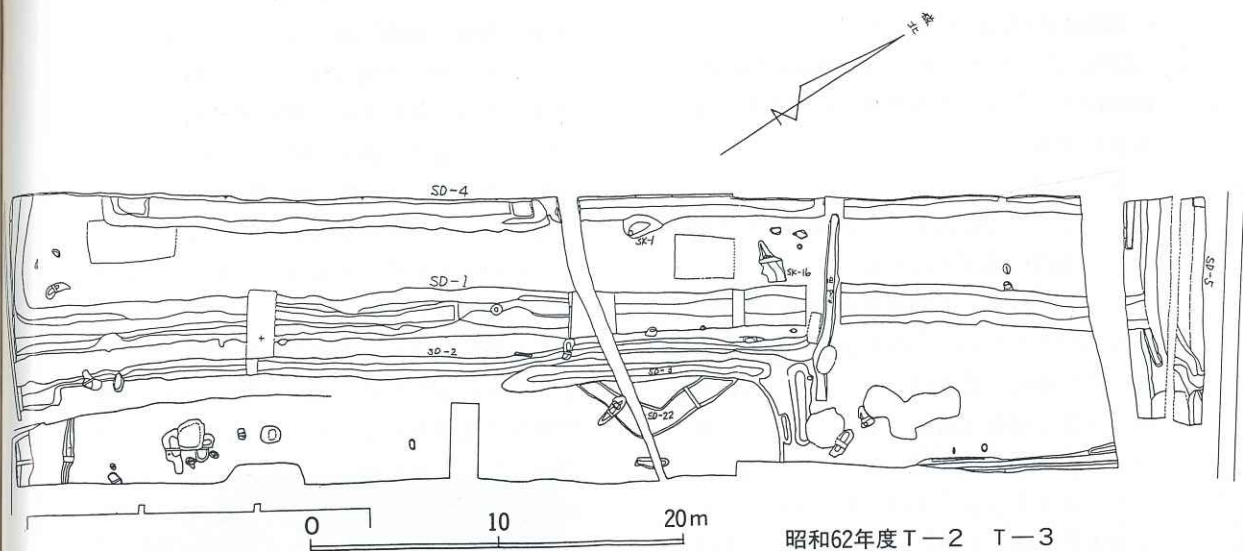
縄遺跡は、栗東町大字縄から大字北中小路にかけての広範な面積を有する遺跡である。中河川の中ノ井川を南端にして、隣接する守山市をも含む微高地上に位置する。これまでの調査例は少なく全容は明かではないが、昭和57年度の調査で弥生時代後期の方形周溝墓2基と平安時代の建物跡が発見され、また、昭和60年度の調査では奈良時代から平安時代にかけての建物跡と溝が発見され成果を上げている。

今回の調査は、栗東町大字北中小路地先において栗東町が計画する総延長約700mにわたる都市計画道路建設に先がけるもので、約

11000㎡について、昭和62年度より3年度にわたる調査計画が立てられている。

昭和62年度は、大字北中小路の集落の南端の約1000m²を調査し、13世紀の溝とその直後の13世紀から15世紀にかけての溝を検出した。これらの溝は、幅約2m、延長53mから60m以上にわたってまっすぐに掘られており、その端部が、L字形に直角に曲折することより、集落内の屋敷地を区画する溝と考えられる。出土遺物は、黒色土器碗をはじめ、大平鉢、灰釉甕、羽釜、脚付釜、白磁碗、須恵系陶器甕、土錘、鉄釘等の多くの遺物が出土している。黒色土器碗は、数カ所で十数個を重ねて投棄されており、また底部に「大」の字の墨書のあるものもあり、特別な性格付けも考えられる。





SD-4 出土

$S = \frac{1}{2}$



昭和62年度調査地

昭和63年度調査は、T-0、T-1、T-4～T-8、T-10、の約4500㎡を対象に、昭和63年4月1日より平成元年3月31日までを要し調査した。

調査結果

T-0：道路側溝部分の試掘調査を実施したが、遺構は検出されなかった。

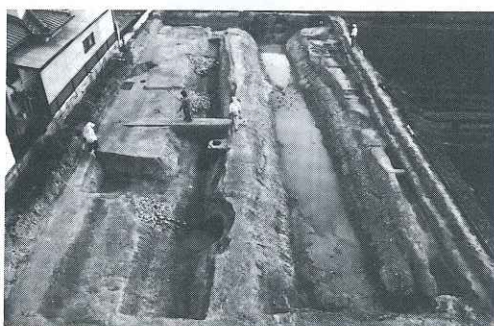
T-1：トレンチの西側の半分は後世の水田開発のためかなり削平され、T-2から続く溝が検出されたにとどまる。この溝は約10mほどで東側へ曲折する。トレンチの東半分では、ピット群が検出されている。

T-4・T-5：SD-6、SD-7が主な遺構である。SD-6は、幅5mの大溝で深さ1.3mを計り、断面は逆台形を呈し、底は平に掘られる。延長60mにわたり検出され、

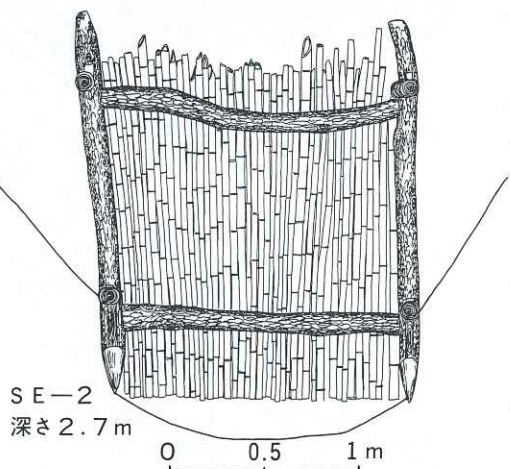
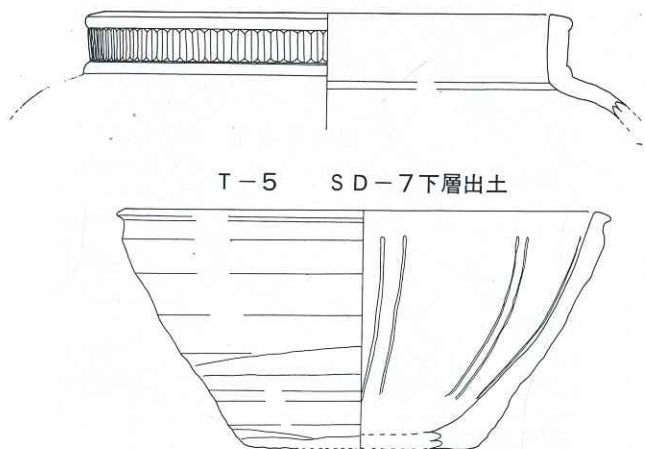
南端で西側へ直角に曲がり、現在の溝と重複する。そして、北端はT-6のSD-12へと連続し西方へ曲折する。室町期から江戸期の中頃までの遺物が出土している。SD-7は、SD-6に切られ、幅3m、深さ1mを測る。上層部はレンズ状堆積であるが、深さ40センチにおいて断面台形を呈する。東側からの数条の小溝が流れ込む部分では、こぶし大の礫石を多量に敷き詰め溝壁の浸食を防止している。五輪石をはじめ、瀬戸系灰釉瓶子、信楽摺鉢等の遺物がある。そのほかの遺構に、江戸期の井戸5基が検出された。そのうちの1基は、丸太材により方形の枠を組み、丸竹を立て並べたもので、SD-6埋没後に掘られている。



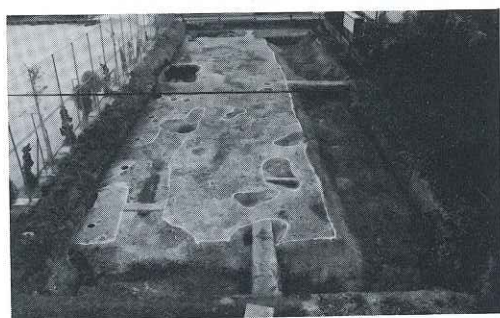
T-4 SD-7



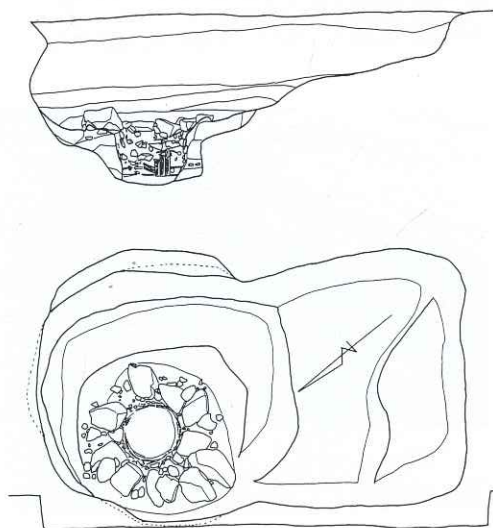
T-4 SD-6 SD-7



T-6 : SD-12は、延長30mにわたって
 検出され、幅5m、深さ1m~1.6mを測る。
 南北両端は西側へ曲折し、「コ」の字形を呈
 する。屋敷地の一区画であろう。この区画内
 からは、ピット群、井戸3基などが検出され
 た。SE-6は、1辺2.5mの丸みのあるプラ
 ンで、深さ1.8mを測る。深さ1mにて平
 均40センチの割石を組み、直径60cmの円形
 の湧水部が作られる。その内壁には、縦に並ん
 だ数枚の板と3段の竹のタガが残っており、
 木桶がはめ込まれていたことが明らかであ

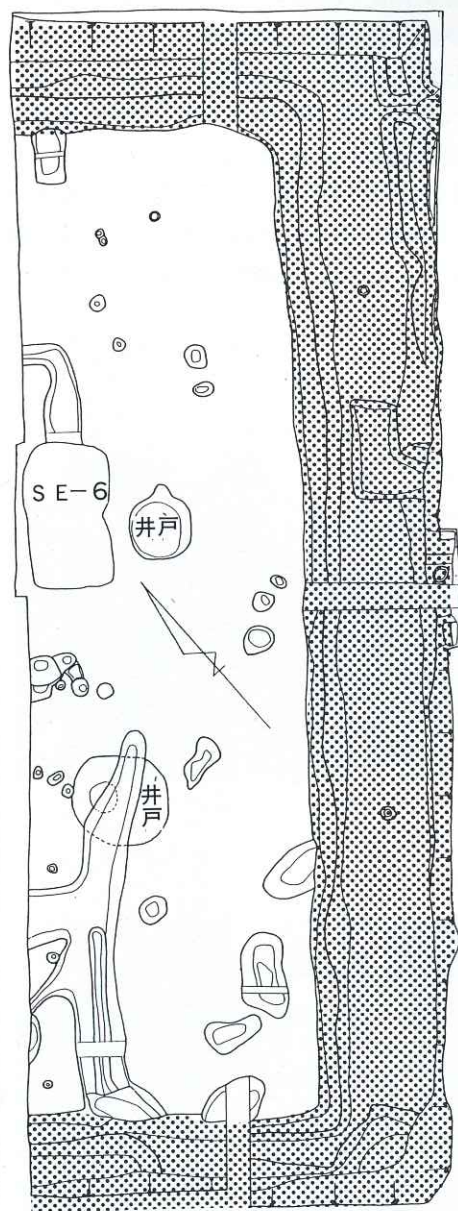


T-6 SD-12



T-6 SE-6

る。南側は長さ2.5mにわたり、緩やかなス
 ロープが設けられる。埋土の中層位には直径
 10cmから20cmの多量の丸石が堆積しており、
 あるいは上部になんらかの施設があったとも
 考えられる。

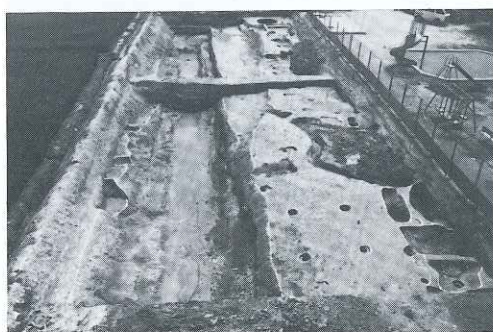
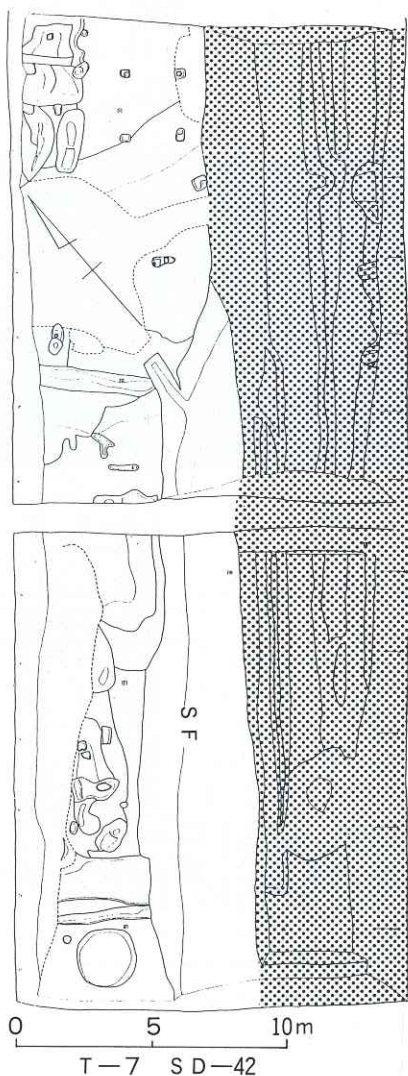


0 10m

T-6 SD-12

T-7・T-8: 調査前の状況は、浅く幅の広い溝が北へ直線的に延びており、T-6のSD-12の延長上でもあることより、同様の大溝の存在が容易に予想できた。現在は公園の一部となっている部分については、つい最近まで池であったそうである。調査により、その池の最下層にて13世紀代の土器を包含する土層が見つかり、池の歴史が明らかとなった。また、池とその横を流れる現在の溝に重複してSD-42が検出された。SD-42は、T-6のSD-12と連続するものであろう。幅6m深さ1.6mを測り、断面は逆台形を呈し、溝底は平かであるが、溝底の一部に13世紀の土

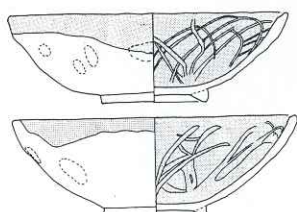
器を含む窪みがあり、池とSD-42の最古期の様相は、現代と全く同様であったと想像できる。T-8の北端で東西方向の溝と合流するが、南から50mの地点で幅4m深さ1mのやや小規模な溝が分岐しており、区画が細分されているようである。この小規模な溝は現在の円光寺裏の排水溝に重複する。SD-42の2カ所から、数点の壺または甕が出土し、人骨と思われる骨片が納められていた。層位は、中層の上位に位置し、SD-42の埋没直前の時期であるが、自然堆積の層序の中にあり、まだ溝としての機能を持つ時期に、何等かの理由で投棄された可能性が高い。



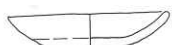
T-7 SD-42



T-7 SD-42



T-7 SX-8 池下層



T-7 SD-42 最下層



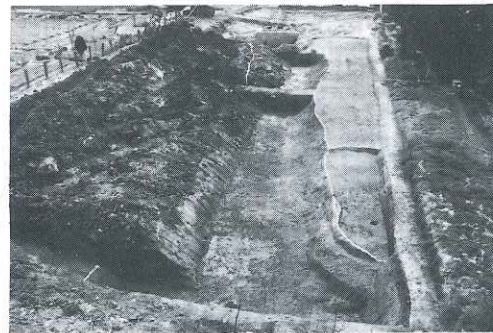
T-7 骨壺



T-10 SD-42



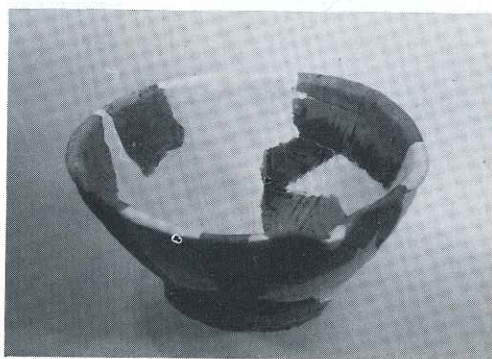
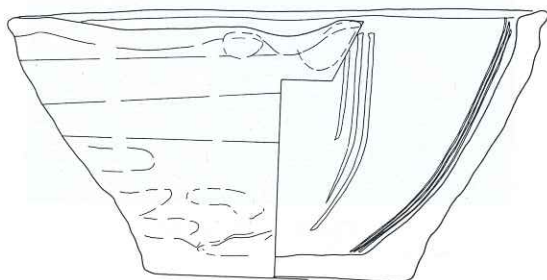
T-8 SD-42



T-10 SD-42

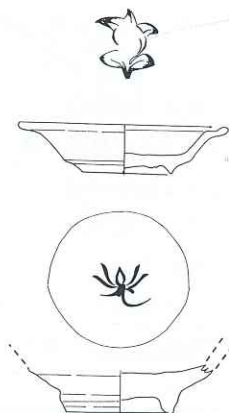
T-10：現在はほとんど埋まっているが元より大きな池があった場所である。「出壺」と呼ばれるこの池の名は、小字名にもなっており、こんこんと水の湧きでる様を現しているのであろう。T-9は未調査であるが、T-8のSD-42はT-10へも続き、この「出壺」に達する。調査では、SD-42の中央部分東半でさらに深い落込みが確認された。現在の池と重複する部分にあり、おそらく、SD-42をはじめ、そのほかの溝への水源池となっていたのであろう。南北両端で西側へ曲がる溝を検出した。また、南から15mの地点でも西方向へ分岐する溝がある。区画内での遺構の検出はない。

まとめ：本調査により発見された溝は幅5mを越える大規模なもので、屋敷地を巡る環濠といえる。その時期は室町時代末期より江戸時代中頃までと推察できるが、現在でもその痕跡を残す部分が見られ、また、コンクリート溝に改善されてはいるものの、区画は今も受け継がれている。昭和62年度調査のT-2、T-3では、13世紀代の区画溝が見つかり、本調査のT-4、T-5でも15世紀前半までのSD-7がある。また、そのほかのトレンチでも同期の溝が数カ所で検出されているが、大規模な環濠に分断されているため、それらのつながりは明かでない。ただし、T-7のSD-42のごとく重複する部分があることより、あるいは同様の、前身となるべき環濠集落が存在した可能性がある。

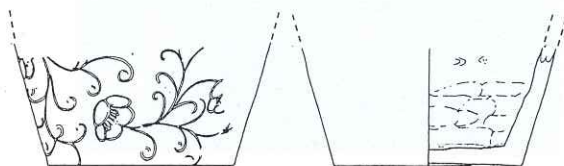
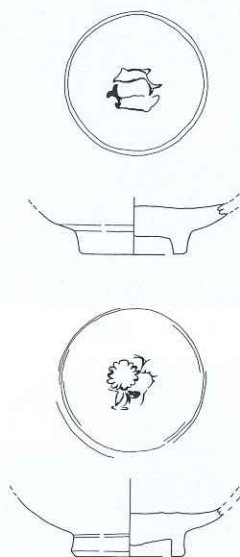


T-4 SD-7 石敷

T-4 SD-6



T-4 SD-7



S = 1/4



正 誤 表

箇 所	誤	正
5 頁、一覧表 28	縄文 弥生土器	縄文・弥生土器
15 頁、3 行目	行なったが	行ったが
15 頁、写真上	伴ない	伴い
15 頁、写真中	伴なう	伴う
16 頁、右 1 行目	つくれられる	つくられている
20 頁、13 行目	貨銭	銭貨
23 頁、図 14	施こされている	施されている
25 頁、13 行目	推積	堆積
25 頁、右 6 行目	推積	堆積
25 頁、右 16 行目	周溝状遺構	周溝状遺構
30 頁、13 行目	堀立柱建物	掘立柱建物
31 頁、8 行目	推積	堆積
33 頁、写真下	キャプションの左右が逆	
34 頁、図	遺跡番号の 24 が、抜けている。	
36 頁、25 行目	関係ずける	関係づける
36 頁、写真上	棚	棚
36 頁、写真上	竪穴式住居	竪穴式住居
36 頁、写真中	棚	棚
39 頁、右 1 行目	堀方	掘方

発 行 日 平 成 元 年 3 月 31 日 発 行

編集・発行 (財)栗東町文化体育振興事業団

滋賀県栗太郡栗東町川辺 390-1

栗 東 町 民 体 育 館 内

印刷・製本 株式会社 松井總業 印刷事業部